

浪速艦長の人物を崇敬して、永く胸裏に其英姿を刻みつけた。

高陞號擊沈

明治二十七年、朝鮮に東學黨の亂起り、清國は兵を牙山に上陸せしめ、我軍亦仁川に上陸して、日清の兩國間に風雲の急なるものが生じた。七月二十三日、我聯合艦隊は佐世保を出で、豫定の行動をする事となり、浪速は第一遊撃隊に編入されて、僚艦吉野、秋津洲と共に、二十五日朝、牙山近海を航してゐると、豊島方面から、清國軍艦濟遠と、廣乙とがやつて来る。彼我の距離三千米突に達する頃、矢庭に濟遠が發砲を始めた。これによつて我三艦からも應射すると、廣乙は陸岸に向つて逃れ、濟遠は全速力で北西に遁走する。浪速は濟遠を追つて進行中、清國軍艦操江と、英國商船の旗を掲げた汽船とが進んで来るのに出逢つた。其商船をよく見ると、清國陸兵を満載してゐる。東郷艦長は直に該汽船に向つて停船投錨を命じ、濟遠の追撃は他艦に譲つて、其汽船に近づいて分隊長人見大尉をして臨検せしめた。汽船は高陞號とて英國に船籍はあるけれど、清國政府の傭船で、清兵千百と大砲十四門とを積んで、大沽から牙山へ輸送する途中である。

此汽船に對して、浪速に隨行することを命ずると、船長の英人は承諾したけれど、清兵共が承知せず、船長を脅して我艦に抵抗せんとした。東郷艦長は相手が英國汽船であるから、飽く迄慎重に交渉して、停船命令を下してから約二時間半も其交渉に費したが、談判がどうにもならぬ。艦橋に立つて其様子を視つめてゐた東郷艦長は遂に最後の決心をして、擊沈を令した。水雷と砲彈とは飛んで忽ちにして高陞號を轟沈して了うた。

此高陞號擊沈は内外に甚大の衝動を興へ、國際問題にもならうとして、英國外務大臣から我公使に向ひ、日本海軍將校の措置から生じたる英國民の生命財産の損害については、日本政府は其責に任ずべきものであると、ねぢ込んで来る。英國東洋艦隊司令長官からも、我聯合艦隊司令長官に向けて、嚴重な抗議を持込んで来た。又、我閣僚の内にも、此重大事件を起して其結末を如何にするつもりかと、憤慨する者さへあつた。

併し東郷艦長は、斷じて我措置に誤りがないと斷言して憚る所がなかつた。果して東郷艦長の處置は、國際公法に照らして少しも非議する處がないもので、有名な公法學者の大家ホルラント博士は、ロンドンタイムス紙上に、論文を掲げて、東郷艦長の處置を正當であると論じ、ウエストレーキ博士

も同じくロンドンタイムス紙上に、高陞號撃沈は至當である事を切論して、遂に天下は東郷艦長の處置の妥當なる事を公認した。

黄海大海戦

海には豊島沖の一戦、陸には成歡牙山の役、海陸共に我軍の勝利に歸し。明治二十七年八月一日、清國に對して宣戰の詔勅發せられ、九月十五日、平壤陥落の激戦があつて幾何もなく、黄海に於て大海戦が行はれ、これに清國艦隊を徹底的に撃破して了つた。黄海戦は日清戦役のクライマックスともいふべきもので、國運の興亡かゝつて此一戦にあり、これによりて強弱の位置を確定して了つたやうなものであつた。

我艦隊は、敵艦隊の黄河北岸に出沒してゐるを知り、全艦隊の主力は九月十六日海洋島に向ひ、大孤山沖に迫る時、敵の主力と遭遇してこゝに大海戦が開かれたのである。其開戦は明治二十七年九月十七日午後零時五十分であつた。

我艦隊は、第一遊撃隊吉野(旗艦)、高千穂、秋津洲、浪速、本隊の松島(司令長官旗艦)、千代田、嚴島、橋立、比叡、扶桑、その外に砲艦赤城、巡洋艦代用西京丸が之れに参加した。

之れに對する清國艦隊は、定遠、鎮遠、來遠、致遠、廣甲、濟遠、經遠、靖遠、超勇、揚威、平遠、廣丙の外に數隻の水雷艇が従つてゐた。

彼我の距離六千米突位の所から敵は猛射を加へ始めたが、我艦隊は静まり返つて三千米突に近づいた頃に、放射を始めた。東郷艦長は浪速艦橋に立つて、敵艦を凝視し、艦員を督勵してゐた。専ら敵の右翼の經遠、靖遠、超勇、揚威を順次に砲撃した。敵の一弾、我右舷側外一米突の邊に落下して、爲に艦長は海水を浴びた。

超勇は我砲弾のために沈み、揚威は火災を起して遁走し、淺瀬に乗揚げて燒棄、致遠亦沈み、斯て敵艦隊は四裂五散となり旗艦定遠さへ燒け、眞先に逃げ出したる靖遠の外清艦はテンデに逃げ出して燒ける定遠を護るものは鎮遠の外に水雷艇一隻を残すのみとなつた。浪速、吉野の遊撃隊は、北ぐる敵艦を尾撃したから、廣甲は大連灣口に座礁して爆沈、經遠は我艦隊のために撃沈された。

我艦隊にても、小艦赤城は敵の包圍する所となつて、艦長が戦死する程の苦戦をなし、西京丸は舵

機を損じ、松島は大きな損傷を受けたが、浪速に至つては敵弾九發を受けたけれど、一人の戦死者も出さなかつた。世に其幸運を稱へて、浪速をば「寶船」と呼んだほどであつた。

黄海の海戦に於て、清國軍艦は思ふ存分にたゞかれてから、全く戦意を喪ひ、威海衛の奥深くへと遁入して威多と出て來ぬ。こゝに於て我軍は威多を各艦に召寄せしむべく、明治二十八年一月二十日、

焼ける定遠を護るものは鎮遠の外に水雷艇一隻を残すのみとなつた。浪速、吉野の遊撃隊は、北ぐる敵艦を尾撃したから、廣甲は大連灣口に座礁して爆沈、經遠は我艦隊のために撃沈された。

我艦隊にても、小艦赤城は敵の包圍する所となつて、艦長が戦死する程の苦戦をなし、西京丸は舵

機を損じ、松島は大きな損傷をうけたが、浪速に至つては敵弾九發を受けたけれど、一人の戦死者も出さなかつた。世に其幸運を稱へて、浪速をば「寶船」と呼んだほどであつた。

黄海の海戦に於て、清國軍艦は思ふ存分にたゞかれてから、全く戦意を喪ひ、威海衛の奥深くへと遁入して滅多と出て來ぬ。こゝに於て我陸軍は威海衛を陥落せしむべく、明治二十八年一月二十日、山東省の榮城灣に上陸を始めたが、之れが警護には浪速が當つた。陸兵の上陸終るや、我軍は海陸より競ひ攻めて遂に敵の提督丁汝昌の降伏自殺となり、忽ちにして威海衛陥落の幕は閉ざされた。

威海衛陥落後の二月十六日、東郷大佐は海軍少將に任ぜられ、常備艦隊司令官に補せられて、吉野に坐乗する事となつて、それより其艦隊を率ゐて澎湖島占領に戦うた。其後幾何もなくして清國から媾和を請ひ、遂に下關の媾和談判となり、媾和條約調印してこゝに日清戦役は終結を告げた。

北清事變

明治三十一年五月十四日、海軍中將に任ぜられ、三十二年一月十九日、佐世保鎮守府司令長官、三十三年五月二十日、常備艦隊司令長官に轉補せられた。折柄清國に義和團事變發生して、東郷司令長官は命によりて帝國居留民保護のために、麾下の軍艦を派遣せしめ、六月十九日、自ら常磐に乗じて佐世保を發し、列國軍艦の集合地なる大沽に着し、兵を天津に進めて居留民保護に當つた。此折露國の關東省總督海軍中將アレキセイフと會見して、其胸底に潜むものを觀破し去つた。

やがて北清事變も落着いたから、命によりて歸朝の途につき、歸りに朝鮮京城に入りて韓國皇帝に謁し、仁川、釜山を経て吳に歸つた。

明治三十四年二月、母堂益子の危篤の報あり、東郷長官は上六番町の邸に馳せて、枕頭に看護したが、効なくして母堂は九十歳の高齡で亡くなつた。其永眠の二月十日、最後の一言は、御奉公を大切にせよの言葉を殘して幽冥境を異にした。東郷長官は悲嘆の裡に葬儀を懇ろに行ひ、吳の旗艦に歸つたが、同年十月一日、舞鶴鎮守府司令長官に轉補、職に就く事二ヶ年にして、茲に世界の耳目を聳動した日露開戦が起つたのである。

日露戰役

日清戰役の結果は、露佛獨の三國干涉によりて、遼東半島還付となり、我國民は皆臥薪嘗膽の憤りを含んだが、露西亞は之れを好機會として、頻りに極東に進出の歩を伸ばし、滿洲から朝鮮に迄魔手をさしのべて、東亞の風雲の漸く險惡なるを感ぜしめた。我政府固より露國の跳梁跋扈をゆるすべきものでない。滿洲撤兵を請求し、遂に第一次撤兵は決行されたけれど、第二次撤兵期なる明治三十六年四月に至ると、露國の態度は俄に急變し來つて、其約を履行せぬのみか、新要求を出したり、東洋艦隊を増加したり、朝鮮に手を染めんとするの形勢を示したり、次第に其横暴ぶりが露骨となつて來た。

こゝに於て我邦では、露國の眞意の那邊にあるか明白になつて來たから、之れに對する方策に對しては、慎重に審議を重ねてゐた。

明治三十六年十月十五日、舞鶴鎮守府司令長官たる東郷中將は、山本海軍大臣から至急出京せよとの命に接して、十七日海相の私邸で、伊東軍令部長と三人鼎座して發議をした。同日二十日、東郷中將は、常備艦隊司令長官に補せられ、其幕僚の更迭があつた。東郷新司令長官は直に佐世保に赴き、旗艦三笠に乗り、之れより部下の訓練と戰備の充備とに力を盡くした。

時局愈々切迫の色が濃厚となる。十二月下旬、艦隊の編成に變更があつて、常備艦隊を解き、新に第一、第二、第三艦隊が編成され、第一、第二艦隊を以て聯合艦隊となし、第三艦隊も後に聯合艦隊に入る、戰時編制となり、東郷中將は第一艦隊司令長官にして、更に聯合艦隊司令長官となり、總艦隊を佐世保に集め、滿を持して放たざるの勢ひを示した。

然るに露西亞側は少しも省みる處なく、益々威脅を試み、其戰意を貯へてゐる事を歴然と現して來た。遂に明治三十七年二月五日、日露外交斷絶して、翌六日午前一時、東郷司令長官は、麾下の諸將を三笠に集めて、恭々しく陸海軍に賜はつた勅語を宣示し、作戰方策を傳へ、肅然として出師の途に就かんとした。其時の我艦隊編成は次の如きものであつた。

聯合艦隊
司令長官 海軍中將 東郷平八郎

第一艦隊
司令長官(旗艦三笠) 海軍中將 東郷平八郎
參謀長 海軍大佐 島村速雄
參謀 海軍中佐 有馬良橋

就かんとした。其時の我艦隊編成は次の如きものであつた。

聯合艦隊

司令長官

海軍中將 東郷平八郎

第一艦隊

司令長官(旗艦三笠)

海軍中將 東郷平八郎

參謀長

海軍大佐 島村速雄

參謀

海軍中佐 有馬良橋

副官

海軍少佐 秋山眞之

機關長

海軍大尉 松村菊男

司令官(旗艦初瀬)

海軍少佐 永田泰次郎

參謀

機關大監 山本安次郎

司令官(旗艦千歳)

海軍少將 梨羽時起

參謀

海軍少佐 塚本善五郎

司令官

海軍大尉 齋藤七五郎

參謀

海軍少將 出羽重遠

第一戰隊

海軍少佐 山路一善

第三戰隊

海軍大尉 竹内重利

通報艦

龍田

第一驅逐隊(四隻)

三笠、朝日、富士、八島、敷島、初瀬

第二驅逐隊(四隻)

千歳、高砂、笠置、吉野

第三驅逐隊(四隻)

龍田

第二艦隊

司令長官(旗艦出雲)

海軍中將 上村彦之丞

參謀長

海軍大佐 加藤友三郎

參謀

海軍中佐 佐藤鐵太郎

副官

海軍少佐 下村延太郎

機關長

海軍大尉 山本英輔

司令官(旗艦磐手)

海軍少佐 船越楫四郎

參謀

機關大監 山崎鶴之助

司令官(旗艦浪速)

海軍少將 三須宗太郎

參謀

海軍少佐 松井健吉

司令官

海軍大尉 飯田久恒

參謀

海軍少將 瓜生外吉

司令官

海軍少佐 森山慶三郎

參謀

海軍大尉 谷口尙眞

第二戰隊 出雲、吾妻、淺間、八雲、常磐、磐手
 第四戰隊 浪速、明石、高千穂、新高
 通報艦 千早

第四驅逐隊(四隻) 第五驅逐隊(四隻)
 第九艇隊(四隻) 第二十艇隊(四隻) 付屬特務艦船十七隻

第三艦隊

司令官(旗艦嚴島) 海軍中將 片岡 七郎
 參謀長 海軍大佐 中村 靜嘉
 參謀 海軍中佐 岩村團次郎
 海軍少佐 松本直吉
 海軍大尉 横山 傳
 海軍少佐 高橋 雄一

副官 海軍少佐 齋藤 利昌
 機關長 海軍少將 東郷 正路
 司令官(旗艦和泉) 海軍少佐 吉田 清風
 參謀 海軍大尉 野崎 小十郎
 海軍少將 細谷 資氏
 海軍少佐 西 禎藏

司令官(旗艦扶桑) 海軍少將 細谷 資氏
 參謀 海軍少佐 西 禎藏
 第五戰隊 嚴島、鎮遠、橋立、松島
 第六戰隊 須磨、秋津洲、千代田
 第七戰隊 扶桑、平遠、海門、磐城、鳥海、愛宕、濟遠、筑紫、麻耶、宇治
 通報艦 宮古

第十艇隊(四隻) 第十一艇隊(四隻) 第十六艇隊(四隻) 付屬特務艦船三隻
 (以上の外に春日、日進の二艦が新に購入されて回航の途上に在る)

此時、我全海軍力は二十六萬餘噸であつたが、之れに對する露國の海軍力は、太平洋艦隊とバルチック艦隊だけでも五十一萬餘噸あり、さし當つての太平洋艦隊は戦艦七隻、装甲巡洋艦四隻、巡洋艦十隻の外に砲艦、驅逐艦等を加へて十九萬千餘噸といふものであつた。尙此上に、戦艦一隻、装甲巡洋艦一隻、巡洋艦一隻、驅逐艦數隻が東洋に向つて回航の途中にあるといふ情報もはいつてゐた。
 佐世保を出發した我主力艦隊は直ちに旅順口に向ひ、瓜生中將の第四戰隊は淺間、第九、第十四艦隊等と共に仁川に向ひ、仁川で警備の任についてゐた千代田と會して、同港に在泊してゐる露艦の状況を知り得たが、斷然仁川に陸兵の上陸を行ふ一方、露艦に向つては仁川退去を要求した、然るに露艦は檣上に戰鬪旗を翻へして戦ひを挑んで來たから、直ちに撃つてワリヤークをして火災を起さしめた上に覆沒せしめ、コレーツと商船スングリーとを爆沈せしめた。之れは明治三十七年二月九日である。

佐世保を出發した我主力艦隊は直ちに旅順口に向ひ、瓜生中將の第四戰隊は淺間、第九、第十四艦隊等と共に仁川に向ひ、仁川で警備の任についてゐた千代田と會して、同港に在泊してゐる露艦の状況を知り得たが、斷然仁川に陸兵の上陸を行ふ一方、露艦に向つては仁川退去を要求した、然るに露

艦は橋上に戰鬪旗を翻へして戦ひを挑んで來たから、直ちに撃つてワリヤークをして火災を起さしめた上に覆没せしめ、コレーツと商船スガリーとを爆沈せしめた。これは明治三十七年二月九日である。

旅順に向つた東郷司令長官の率ゐる艦隊は、先づ驅逐隊を遣つて、旅順口に於て敵艦を襲撃せしめて、其三艦をして或は岸に乘揚げしめ、或は坐洲せしめた。之れ二月八日の夜半、九日の未明の事であつた。然る後九日の朝に至り、第一、第二、第三戰隊を以て旅順を壓し、敵の主力艦隊と砲戦を交へて、飽く迄屈せしめて引揚げた。此一戦で全く敵の膽を奪ふものがあつた。

二月九日の旅順襲撃、仁川海戦を序幕として、つぎ／＼に攻撃は繰り返へされた。就中世に名高き旅順口閉塞の決行は鬼神をも泣かしむる壯烈なものであつた。

其内に露西亞は當時名將として世界に名高きマカロフ提督を、新に太平洋艦隊司令長官に任命して其士氣の衰へたるを振ひ起さうとした。マカロフ提督は三月八日旅順に着き、之れより東郷對マカロフの對抗は、世界の注視の下に火花を散らす事となつたのである。

流石マカロフ提督の指揮下になつて以來、露國艦隊は面目を新にして、沮喪し切つた士氣に幾分の回復を見たやうであつた。しかし東郷司令長官は、敵提督の套用手段を見破つて、艦隊附屬敷設隊司令小田喜代藏中佐に命じて、其必ず通航するべき水路に機械水雷を沈置せしめた。果してマカロフは之れに罹つて、旗艦ベトロパウロウスクの轟沈と共に海中に沈んで了うた。彼れの着任後まだ僅か三十七日しか経つてゐない四月十三日であつた。

旅順港口を閉塞した後、我陸兵第二軍は遼東半島に上陸したが、聯合艦隊は一方之れが掩護すると共に、旅順口の直接封鎖を行つた。然るに五月に入つて、我艦隊には多くの損害が續出した。戦艦初瀬、八島の敵の沈置水雷のために爆沈したのや、巡洋艦吉野が濃霧の爲に僚艦と衝突して沈没したのを始め、宮古、大島、赤城、曉其他の沈没があつた。しかし東郷司令長官は更に動する様子なく、遂に五月二十六日、關東州南部の封鎖宣言をなして、斷然之れを實行した。陸上では第二軍が、金州、南山を陥れて、大連一帯を占領したから、旅順は背面から脅かされるやうになり、従つて港内の敵艦は何時逸出するやも計られぬといふ場合になつた。

六月六日、東郷司令長官は海軍大將に任ぜられ、同日、乃木第三軍司令官が上陸して、愈々旅順の陸上攻撃が始まる。

六月二十三日、旅順の敵艦隊が出動したとの報に接し、裏長山列島の根拠地にゐた聯合艦隊は、直に之れを撃破せんとして出かけると、敵は我艦隊を見て俄に背進した。乃ち驅逐隊、水雷艇隊をして之れを攻撃せしめて、敵をして混亂に陥らしめた。

黃海々々戰

明治三十七年八月十日、旅順口を脱出した露國艦隊を黃海に於て撃破したのが、日露戰役の黃海々々戰とて有名なものである。去る六月二十三日の脱出に失敗して、案外日本艦隊がまだ優勢である事を悟つた敵艦隊は、港内深く潜んでゐたが、日本の陸軍が旅順の背面から攻撃するし、本國からは敵の封鎖を破つてウラジホへ行けといふ命令が來たから、八月十日の朝、十幾隻の軍艦は俄に出動を始めた。我艦隊は之れを遇岩の近傍に遑へて砲撃した。露艦亦應戰して戰鬪再三に及び、黃昏に及んで最も激烈であつた。敵の旗艦ツエザレウキツチは我砲彈をうけて、左舷に傾き、司令官戰死し、參謀長以下の死傷があつた。之れで露艦隊の陣形大に亂れて、南に走り、北に走りなどして相離散した。我驅逐隊水雷艇隊は之れを尾撃して損害を蒙らしめた。我軍にても三笠は大小二十餘箇の敵彈をうけて破損九十五箇所に上り、死傷者もあつた。併し敵の損害は戰艦一隻、巡洋艦三隻、驅逐艦五隻を事實上に失うて、殘艦も辛うじて旅順に逃げ歸り、之れで旅順の敵艦は最早出港の勇氣もなくなり黃海々々戰は旅順の露國艦隊としては眞に最後の活動となつたのであつた。

露國増遣艦隊來る

露國にては、バルチック艦隊を太平洋第二艦隊として増遣するの議があり、着々其準備に急いでゐた。之れに對して、我艦隊は長日月の奮闘に速力衰へ、機關に故障生じたるものもあり、兵器の毀損も幾分あるから、新來の敵に對するには、速に内地に引あげて十分の修理をなすの必要がある。之れによつて、我乃木軍は旅順要塞の攻略に先きんじて、二〇三高地を奪ひ、港内の敵艦を瞰射するの急を要するを感じて之れに向つて攻撃を開始した。聯合艦隊からも大砲を送つて之れを援助した。激戰猛襲數次にして、明治三十七年十二月二日、遂に二〇三高地を我手裡に收め得た。こゝから砲

撃を加へたから、旅順港内の敵艦は續々撃沈されて了うた。

こゝに於て、乃木軍の參謀は、司令官の使として三笠に來り、敵艦隊は殆んど滅亡したから、第三軍に御心配なく、艦隊の大部分を速に内地へ歸還せられたいと申し出て來た。東郷司令長官大に喜び、十二月二十日、第三軍司令部に乃木司令官を訪うて、兩將軍は堅い握手を交はされた。

を要するを感じて之れに向つて攻撃を開始した。聯合艦隊からも大砲を送つて之れを援助した。激戦猛襲數次にして、明治三十七年十二月二日、遂に二〇三高地を我手裡に收め得た。こゝから砲

撃を加へたから、旅順港内の敵艦は續々撃沈されて了うた。こゝに於て、乃木軍の參謀は、司令官の使として三笠に來り、敵艦隊は殆んど滅亡したから、第三軍に御心配なく、艦隊の大部分を速に内地へ歸還せられたいと申し出て來た。東郷司令長官大に喜び、十二月二十日、第三軍司令部に乃木司令官を訪うて、兩將軍は堅い握手を交はされた。

十二月二十三日、伊東軍令部長の電訓により、東郷司令長官は、三笠で裏長山列島を發して呉に歸り、上村第二艦隊司令長官と共に、同月三十日入京した。直に宮内省差廻しの馬車に乗つて登營し、御前に於て戦況の伏奏をなし、優渥なる勅語を賜つた。

明治三十八年一月二日、旅順は遂に陥落して、降伏開城の報が來た。東京市民は日比谷公園に會して、其祝賀會を開いた。東郷、上村兩司令長官、之れに臨席し、式後、東郷長官は、市長の請ふ儘に記念の月桂樹を植ゑた、之れは今も尙存してゐる。敵の増遣艦隊を逸へ撃つについては、山本海相、伊東軍令部長とも謀議して、我艦隊の全力を朝鮮海峡に置き、臨機の動作をなす事にした。之れを以て、東郷長官は二月六日東京を出で、呉に於て三笠に乗り、二十一日鎮海灣に着して、こゝに總艦隊を統率する事になつた。

露國の増遣艦隊は、太平洋第二艦隊と稱し、司令長官にはロジエストウエンスキーを以て任じ、主力艦隊は第一戰艦隊(戰艦四隻)、第二戰艦隊(戰艦二隻)、巡洋艦(一隻)、驅逐艦九隻より成り、巡洋艦隊は第一巡洋艦隊(巡洋艦四隻)、第二巡洋艦隊(巡洋艦四隻)より成り、別に二隊の運送船隊と特務任用艦等を加へ、堂々たる大艦隊を編成して、明治三十七年十月十五日、バルチック海のリパウ軍港を出で、遙かに東洋に向つて征途に上つた。

途中マダガスカルに於て荏苒日を過してゐる間に、露本國に於ては、第三艦隊として、五隻の裝甲艦を之れに加ふる事になり、ネボガトフを司令官として急派した。第二艦隊四十五隻は、四月八日新嘉坡を過ぎて支那海に入り、十四日佛領安南に着き、五月九日、後遣の五隻の裝甲艦の到着を待つて總計五十隻の大艦隊となり、五月十四日、浦鹽斯德に向つて、ヴァン・フォン灣を出發し、二十五日吳淞沖に達した頃、足手纏ひの運送船等を放ち、三十餘隻の艦隊となつて、朝鮮海峡東水道に向つて進んで來た。二十六日は濟州島と五島との中間を行き、二十七日益々進んで、午前五時には、九州五島の北西約三十海里の邊に來つた。

我哨艦信濃丸之れを發見して、無線電信で直に我艦隊に報じた。

參謀 大尉 鳥巢 玉樹
 司令官 中將 出羽 重遠
 參謀 中佐 山路 一善
 參謀 中佐 森山 慶三郎
 參謀 中佐 瓜生 外吉
 參謀 少佐 東郷 正路
 參謀 少佐 吉田 清風
 參謀 少佐 奧田 貞吉

參謀 大尉 丸山 壽美太郎
 司令官 大尉 四竈 孝輔
 參謀 大尉 筑土 次郎
 參謀 少將 山田 彦八
 參謀 少佐 伊集院 俊
 參謀 大尉 小林 躋造
 參謀 大尉 島 敷
 參謀 大尉 朝 日
 參謀 大尉 進

艦第一隊

第一戰隊 東郷司令官直率
 第三戰隊 出羽司令官直率
 第二戰隊 上村司令官直率
 第四戰隊 瓜生司令官直率
 第一驅逐隊 春 有 曉
 第二驅逐隊 龍 電 朧
 第三驅逐隊 雲 霧 雷
 第四驅逐隊 雲 霧 雷
 第十艇隊 眞 千 鶴
 出 常 淺 千 浪 明
 雲 (上村司令官旗艦)
 磐 (艦長海軍大佐吉松茂太郎)
 間 (艦長海軍大佐八代六郎)
 早 (艦長海軍中佐江口麟六)
 速 (瓜生司令官旗艦)
 石 (艦長海軍大佐宇敷甲子郎)
 眞 千 鶴 (艇長海軍大尉玉岡吉郎)
 雲 霧 雷 (矢島司令官乘艦)
 雲 霧 雷 (艦長海軍少佐齊藤半六)
 雲 (吉島司令官乘艦)
 雲 霧 雷 (艦長海軍少佐白石眞介)
 鳥 隼 薄 曙 雷
 雲 霧 雷 (艦長海軍少佐菅哲一郎)
 雲 霧 雷 (艦長海軍大尉山内四郎)
 雲 霧 雷 (艦長海軍少佐增田忠吉郎)
 雲 霧 雷 (艦長海軍少佐相羽恆三)
 雲 霧 雷 (艇長海軍大尉梅老原啓一)
 雲 霧 雷 (艇長海軍大尉宮本松太郎)
 雲 霧 雷 (艦長海軍大佐村上格一)
 雲 霧 雷 (艦長海軍大佐松本有信)
 手 (鳥村司令官旗艦)
 高 千 總 (艦長海軍大佐毛利一兵衛)
 對 馬 (艦長海軍大佐仙頭武央)

艦第二

驅逐隊四

霧 (鈴木司令乘艦)
潮 (艦長海軍少佐南里團一)

雨 (艦長海軍少佐小林研藏)
雲 (艦長海軍少佐鎌田政猷)

驅逐隊五

不知
夕 (廣瀨司令乘艦)
霧 (艦長海軍少佐桑島省三)

叢
陽 (艦長海軍大尉吉川安平)

第九艇隊

蒼
燕 (河瀨司令乘艦)
(艦長海軍大尉田尻唯二)

雁
鵠 (艦長海軍大尉栗屋雅三)

第十九艇隊

鷗
雉 (松岡司令乘艦)
(艦長海軍大尉關才右衛門)

鴻
鵠 (艦長海軍大尉井口第二郎)

第五戰隊

嚴
松 (片岡司令)
鳥 (艦長海軍大佐土屋保)
鳥 (艦長海軍大佐奧宮衛)
八重山 (艦長海軍中佐西山對親)

鎮
立 (武富司令官旗艦)
(艦長海軍大佐福井正義)

第六戰隊

須
秋 (東郷司令官旗艦)
津 (艦長海軍大佐廣瀨勝比古)

千代田 (艦長海軍大佐依仁親王)
泉 (艦長海軍大佐石田一郎)

第七戰隊

扶
筑 (山田司令官旗艦)
耶 (艦長海軍中佐藤田定市)

高
鳥 (艦長海軍中佐矢代由德)
海 (艦長海軍中佐牛田從三郎)
宇
治 (艦長海軍少佐金子滿喜)

艦第三

第十五艇隊

雲
鶴 (近藤司令乘艦)
(艦長海軍大尉森駿藏)

鷺
鶉 (艦長海軍大尉橫尾尙)
(艦長海軍大尉鈴木正)

第十艇隊

第四十三號 (大瀧司令乘艦)
第四十一號 (艦長海軍大尉水野廣德)

第四十號 (艦長海軍大尉中原彌平)
第三十九號 (艦長海軍大尉大金實)

第十一艇隊

第七十三號 (富士本司令乘艦)
第七十四號 (艦長海軍大尉太田原達)

第七十二號 (艦長海軍大尉笹尾源之丞)
第七十五號 (艦長海軍大尉河合退藏)

第二十艇隊

第六十五號 (久保司令乘艦)
第六十四號 (艦長海軍大尉富永寅次郎)

第六十二號 (艦長海軍大尉戶名肱三郎)
第六十三號 (艦長海軍大尉江口金馬)

第一艇隊

第六十九號 (福田司令乘艦)
第六十七號 (艦長海軍大尉中牟田武正)

第七十九號 (艦長海軍大尉南郷次郎)
第六十八號 (艦長海軍大尉寺岡平吾)

亞米利加丸 (艦長海軍大佐石橋甫)

佐渡丸 (艦長海軍大尉釜屋忠道)

信濃丸 (艦長海軍大佐成川揆)

滿洲丸 (艦長海軍中佐西山保吉)

八幡丸 (艦長海軍中佐川合昌吾)

臺南丸 (艦長海軍中佐高橋助一郎)

熊野丸 (艦長海軍大佐井正次郎)

日光丸 (艦長海軍大佐木村浩吉)

- 第六十四號 (艇長海軍大尉富永寅次郎)
- 第六十九號 (艇長司令兼務)
- 第六十七號 (艇長海軍大尉中牟田武正)
- 第六十三號 (艇長海軍大尉江口金馬)
- 第七十九號 (艇長海軍大尉南郷次郎)
- 第六十八號 (艇長海軍大尉寺岡平吾)

第一艇隊

附屬特務艦隊
小倉司令官指揮

- 亞米利加丸 (艇長海軍大佐石橋甫)
- 佐渡丸 (艇長海軍大尉釜屋忠道)
- 信濃丸 (艇長海軍大佐成川撥)
- 滿洲丸 (艇長海軍中佐西山保吉)
- 八幡丸 (艇長海軍中佐川合昌吾)
- 臺南丸 (艇長海軍中佐高橋助一郎)
- 熊野丸 (艇長海軍大佐井正次郎)
- 日光丸 (艇長海軍大佐木村浩吉)
- 臺中丸 (小倉司令官兼務 艇長海軍大佐松村直臣)
- 春日丸 (艇長海軍中佐小花三吾)
- 大仁丸 (艇長海軍大佐荒川規志)
- 平壤丸 (艇長海軍中佐茶山豊也)
- 京城丸 (艇長海軍中佐花房祐四郎)
- 愛媛丸 (指揮官海軍中尉米村末喜)
- 蛟龍丸 (指揮官海軍中尉辛島昌雄)
- 高阪丸 (指揮官海軍中尉河村達藏)
- 武庫川丸 (指揮官海軍中尉立川常次)
- 第五宇和島丸 (指揮官海軍中尉米村末男)
- 海城丸 (指揮官海軍中尉石丸藤太)
- 扶桑丸 (指揮官海軍中尉中村熊三)
- 關東丸 (監督官海軍少佐佐多直道)
- 三池丸 (監督官海軍少佐國枝勝三郎)
- 神戶丸 (軍醫長 海軍々醫大監石川詢)
- 西京丸 (軍醫長 海軍々醫大監太田彌太郎)

右の外竹敷要港部及び吳鎮守府に屬する左の四艇も海戦に参加せり。

- 第三十四號 (青山司令兼務 艇長司令兼務)
- 第三十一號 (艇長海軍大尉山口宗太郎)
- 第三十二號 (艇長海軍大尉人見三郎)
- 第三十三號 (艇長海軍大尉河北一男)
- 第十六艇隊 白鷹 (若林司令兼務 艇長司令兼務)
- 第六十六號 (竹敷にて修理中 艇長海軍大尉角田貫三)
- 第十八艇隊 第三十六號 (河田司令兼務 艇長司令兼務)
- 第六十號 (艇長海軍大尉岸科政雄)
- 第六十一號 (艇長海軍大尉宮村曆造)
- 第三十五號 (艇長海軍大尉副島村八)
- 第五艇隊 福龍 (小川司令兼務 艇長司令兼務)
- 第二十五號 (艇長海軍大尉神代護次)
- 第二十六號 (艇長海軍大尉田中吉太郎)
- 第二十七號 (艇長海軍中尉中山友次郎)

第一戰艦號
司令長官ロジエ
ストウエンスキ
中將直率

- クニヤージ・スウオーロフ (排水量噸數 一三、五一六)
- イムペラートル、アレクサンドル三世 (排水量噸數 一三、五一六)
- ボロ (排水量噸數 一三、五一六)
- アリヨ (排水量噸數 一三、五一六)
- ルノ (排水量噸數 一三、五一六)

第一驅逐隊

ブ	ブ	ブ
	イ	イ
ラ	イ	ス
	ー	ツ
ウ	ヌ	ル
イ	イ	イ
(速排水量噸力數)	(速排水量噸力數)	(速排水量噸力數)
三五〇	三五〇	三五〇
二六〇	二六〇	二六〇

第二驅逐隊

ポ	ベ	ブ	グ	グ	ア	カ
ー	ヅ	レ	ス	ロ	リ	ス
ド	ブ	ス	シ	ー	ト	ト
ル	リ	シ	ヤ	ズ	ヨ	ロ
イ	ヨ	ー	ー	キ	ー	ー
イ	ヌ	シ	チ	イ	マ	ル
(速排水量噸力數)	(速排水量噸力數)	(速排水量噸力數)	(速排水量噸力數)	(速排水量噸力數)	(速排水量噸力數)	(速排水量噸力數)
三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	五、〇七四	三、一九二
二六〇	二六〇	二六〇	二六〇	二六〇	三、一〇七	一、一〇七

日本海々戦

當日は海面に濛氣あつて五六海里を展望し得るのみであつた。風は西南西で五米突を算し、波は相應に高かつたから、水雷艇を三浦灣に避けしめ、東郷司令長官は我聯合艦隊を率ゐて、遠來の露國艦隊を殲滅せんと、正午頃沖の島北方約十海里に達した。こゝで西方に變針し、午後一時三十九分、南西方向に敵艦隊を發見した。

參謀長以下の幕僚を隨へた東郷長官は、三笠の前部最上艦橋に立つて、敵艦隊を凝視してゐたが彼我接近して敵は三笠の南微西七海里にあり、二列縱隊となつてやつて來る。東郷司令長官は全軍に戰鬥開始を命ずると、秋山參謀は、先刻の信號が整へてありまするが掲揚致しませうかと聞くと、長官は頷いて諾した。之れ一時五十五分、千古に輝く信號が、三笠橋頭に高く翻へつた。

皇國の興廢、此の一戦に在り、各員一層奮勵努力せよ。

午後二時二分、東郷長官は我第一、第二戰隊を南西微南に變針せしめて、彼我兩隊は縱陣を以て相對し、各反對の方向に航行してゐる状態となつた。彼我の距り一萬米突、しかも一分間約八百米突の割合で相接近しつゝあつた。午後二時五分、彼我の距離は八千米突に近づいた。此時東郷長官は參謀長を顧みて、右手を舉げて左に一振した、「取舵」の號令一下、三笠は艦首を俄に左舷に廻轉して、敵と同針路を執る事になつた。敵は八千米突にあつたが、此意外な我艦隊の行動に最初は驚いたが、又砲撃するの好機會と喜んで、三笠につゞいて敷島が新針路につかんとする時、敵は全艦隊に向つて砲撃開始を命じた。之れ午後二時八分、兩軍旗艦の距離は七千米突。

敵の亂射に逢つたけれど、我艦隊はまだ満を持して放たぬ。東郷長官は艦橋上に儼として立つてゐる。我艦隊の針を變じたは甚だ冒險の如きものがあつたけれど、之れ畢竟皮を切らして肉を切り、肉を切らしめて骨を切るの手術に出たのである。已にして我第一、第二戦隊は敵の前路を遮つて、所謂丁字戦法が實現し、こゝに我全捷の運命が確定づけられたのであつた。

彼我の距離は七千米突となり、更に六千四百米突となるや、東郷長官は發砲を命じて、我艦悉く猛射を浴せかけた。

前路を遮られ、猛射に逢つた敵艦隊は之れを避ける爲に漸次東方に變針したから、不規則な單縦陣形となつて、我れに並行の姿勢となり、次第に艦の損傷を表はすに至つた。我第一戦隊は適時に變針しつゝ距離の短縮を計り、其速力を利用して敵を壓迫しながら、四千六百米突を測る頃、急射撃を行ひ、第二戦隊之れに和して闘うたから敵艦隊は次第に損害を増加し、敗色が十分現はれかけた。

三笠艦橋上に立つ東郷長官は戦闘の經過を監視してゐたが、一令下すると共に、第一戦隊は左六點の一齊回頭をなし、日進が嚮導艦となり、三笠が殿艦となるの前とは反對の形となつて、敵の遁路を遮つた。第二戦隊は其速力を増加して敵の先頭を壓し、三千米突の距離で猛撃した。之れ丁字戦法が乙字戦法に變つたのである。

之れによりて敵は徹底的に撃たれて、オスラービヤ先づ沈没し、スウオーロフついで損じ、其他の諸艦にも火災を起して、列外に逸するもの續出した。今はかなはぬと南方に逃げ出しかけたのを、我艦隊は或は追ひ、或は遮りして苦しめた。我第一、第二戦隊の外の艦隊も参加し來つて、混亂せる敵を攻撃して、午後六時前後には、敵をして全く潰亂せしめ、或は北に、或は西に、或は西南にと、雜然遁走せしむるに至つた。時漸く日暮に近づいたから追撃をやめたが、この一時間ばかりの休戦中に敵は離散せるものを集めて再び隊形を整へたから、我艦又も砲撃して、敗殘の敵を撃沈損傷せしめた。午後七時二十八分、日没時に至つて砲撃をやめ、我全軍は北航して、明朝鬱陵島に集合する事を令して、戈を收めて還つた。其代りに我驅逐隊や水雷艇隊が夜に入つて殘餘の敵を苦しめて、或は轟沈或は撃破した。

此戦闘に於て我艦にも損害がないでもない、殊に三笠は旗艦であるだけに、敵の砲撃を蒙る事最も多く、就中三番六吋砲郭に命中した十二吋砲弾のためには、其全部を殺傷し、補缺員もついで全滅した程であつた。前橋附近に落下した巨弾のためには、附近の諸倉庫を破壊し、弾片は司令塔及び艦橋

を襲うて、副長、水雷長、參謀以下十餘名を傷つけた。又五番六吋砲郭に炸裂した砲弾の爲には、之れ亦全員を斃し、大橋の上部に中つたものは橋を斷ち、大將旗及戰闘旗を打ち落したが、幸ひに東郷艦長以下の首脳部には損傷なく、又二三の水雷艇を失ふた以外に我艦の沈没したものは一もなかつた。



止軍艦に於て我艦にも眺望がなして、殊に三笠は敵艦でゐるために敵の砲撃を蒙る事最も多く、就中三番六吋砲郭に命中した十二吋砲弾のためには、其全部を殺傷し、補缺員もついで全滅した程であつた。前橋附近に落下した巨弾のためには、附近の諸倉庫を破壊し、弾片は司令塔及び艦橋

を襲うて、副長、水雷長、參謀以下十餘名を傷つけた。又五番六吋砲郭に炸裂した砲弾の爲には、之れ亦全員を斃し、大橋の上部に中つたものは橋を斷ち、大將旗及戰團旗を打ち落したが、幸ひに東郷艦長以下の首脳部には損傷なく、又二三の水雷艇を失ふた以外に我艦の沈没したものは一もなかつた。

翌くる五月二十八日の戰鬪は全く敵の勢熾りて、遂に降伏するもの續出し、敵の司令長官ロジエス トウエンスキー中將を捕虜とするに及んだ。茲に於て、露國増遣艦隊三十八隻の内、戰艦六隻、巡洋艦四隻、海防艦一隻、驅逐艦四隻、假裝巡洋艦一隻、特務艦三隻、合計十九隻は撃沈され、戰艦二隻、海防艦二隻、驅逐艦一隻、合計五隻は捕獲され、病院船二隻は抑留、其他は中立港へ遁入して武装解除されたり、逃走中破壊若しくは沈没したりして、漸く當初の目的地のウラジホストックへ逃げ込んだのは巡洋艦一隻、驅逐艦二隻のみで、司令長官以下六百六名を捕虜と、一萬幾千名の將卒が戰死したのである。之れに對する我損害は水雷艇三隻を失ひ、死傷七百名を出したに過ぎぬ。之れ實に未曾有の大海戰であると共に、未曾有の大勝利であつたのである。

六月初旬に至り、此戰鬪の詳報が發表せられたが、それによると。

天佑と神助に由り我が聯合艦隊は五月二十七八日敵の第二、第三聯合艦隊と日本海に戦ひて遂に殆ど之を撃滅することを得たり、初め敵艦隊の南洋に出現するや上命に基き當隊は豫め之を近海に迎撃するの計畫を定め朝鮮海峡に全力を集中して徐ろに敵の北上を待ちしが敵は一時安南沿岸に寄泊したる後、漸次北航し來りしを以て其の我が近海に到達すべき數日前より豫定の如く數隻の哨艦を南方警戒線に配備し各戰列部隊は一切の戰備を整へ、直に出動し得る姿勢を持して各其の根據地に泊在せり、果然二十七日午前五時に至り南方哨艦の一隻信濃丸の無線電信は敵艦隊二〇三地點に見ゆ、敵は東水道に向ふものゝ如しと警報し至軍踴躍直に發動し各部隊は豫定の部署に準じて對敵行動を開始せり、午前七時内方警戒線の左翼哨艦たりし和泉も亦敵艦隊を發見して敵已に宇久島の北西二十五海里の地點に達し北東に抗進するを報じ第五、第六戰隊次第で第三戰隊も午前十時十一時の交壹岐、對島の間にて敵と觸接し、爾後沖の島附近に至る迄此等の諸隊は時に敵の砲撃を受けしも、終始能く之と觸接を保有し詳に時々刻々の敵情を續報せしかば、此の日海上濛氣深く展望五海里以上に及ばざりしも、數十海里を隔つる敵影恰も限界に映するが如く未だ敵を見ざる前已に敵の戰列部隊は其の第二、第三艦隊の全力にして特務艦船約七隻を伴ふことと敵の陣形は二列縦陣にして其の主力は右翼列の先頭に占位し、特務艦船は後尾に續航せること又敵の速力は約十二海里にして、尙北東に向針せること等を知り、本職は之に依り我が主力を以て午後二時頃沖の島附近に敵を迎へ先づ其左翼列先頭より撃破せんとする心算を立つるを得たり



第一、第二、第四戰隊及び各驅逐隊は正午已に沖の島の北方約十海里に達し敵の左側に出でんが爲め更に西方に針路を執りしが午後一時三十分頃第三戰隊及び第五、第六戰隊等も敵と觸接を保ちつゝ相前後して漸次に來り合し、同時四十五分に至り正に我が左舷南方約數海里に初て敵影を發見せり、敵は豫期の如く其の右翼の先頭に「ポロチノ」型戰艦四隻の主力戰隊を置き「オスラービヤ」「シソイ、ウエリーキー」「ナワリン」より成る一隊は左翼列の先頭に占位し「ニコライ一世」外海防艦三隻より成る一隊之に次ぎ「ジエムチウグ」、「イズムルード」の二艦は兩列の間に介在して前方を警戒せるものゝ如く、尙其の後方濛氣の裏には「オレーグ」、「アウローラ」以下二、三等巡洋艦の一隊「ドンスコイ」、「モノマーフ」其他特務艦船等數海里に亙りて連綿續航するを仄に認むるを得たり、是に於て戰鬪開始を令し一時五十五分全軍に對し「皇國ノ興廢此ノ一戰ニ在リ各員一層奮勵努力セヨ」との信號を掲揚せり、而して第一戰隊は少時南西に向首し敵と反航通過すると見せしが、午後二時五分急に東に折れ其の正面を變じて斜に敵の先頭を壓迫し、第二戰隊も續航して其の後に連り第三、第四戰隊及び第五、第六戰隊は豫定戰策に準じ何れも南下して敵の後尾を衝けり、之を當日の戰鬪開始の際に於ける彼我の對勢とす。

第一、第二戰隊の戰況

敵の先頭部隊は第一戰隊の壓迫を受けて稍々其の右舷に轉舵し、午後二時八分彼より發砲を開始せしが我が暫く之に耐へて、射距離六千米突に入るに及び猛烈に敵の兩先頭艦に砲火を集注せり、敵は之が爲め益々東南に擊壓せらるゝものゝ如く其の左右兩列共に漸次東方に變針し自然に不規則なる單縱陣を形成して我と並航の姿勢を執り其の左翼列の先頭艦たりし「オスラービヤ」の如きは須臾にして擊破せられ、大火災を起して戰列を脱せり、是の時に當り第二戰隊も既に悉く第一戰隊の後方に列し我が全線の掩撃砲火は射距離の短縮と共に益々顯著なる効果を呈し敵の旗艦「スウォーロフ」二番艦「アレキサンドル三世」も大火災に罹りて戰列を離れ陣形愈々亂れ後續の諸艦亦火災に罹れるもの多く其の騰煙は西風に靡きて忽ち海上一面を蔽ひ、濛氣と共に全く敵影を包み第一戰隊の如きは爲めに一時射撃を中止せるの状況なりき、又我が軍に於ても各艦多少の損害を蒙り淺間の如きは後部水線に敵弾を受けて舵機を損じ且浸水甚しく一時止むを得ず列外に落伍せしが幾もなく應急修理して再び戰列に入れり、是れ午後二時四十五分前後に於ける彼我主力の戰況にして勝敗は既に此の間に決せり。

我が主隊は斯の如く敵を南方に壓迫し煙霧の中敵影を發見する毎に緩徐に之を砲撃しつゝ午後三時の比には既に敵の前路に出て約南東に向針しありしが敵は俄に北方に向背し我が後尾を廻りて北走せんとするが如きを以て第一戰隊は急に左十六點に一齊回頭し日進を嚮導として北西に向ひ、第二戰隊も其の通跡を過ぎたる後正面を變じて之に續き再び敵を南方に擊壓して之を猛射す午後三時七分に至りて敵艦「ジエムチウグ」は第二戰隊の後方に突進し來りしも遂に我が砲火に因りて殆んど擊破せられ、すでに戰鬪力を失ひたる「オスラービヤ」も同時十分に沈没し孤立せし「スウォーロフ」は益々大破して其の一槽二煙突を失ひ全艦煙焰に包まれ操縱する能はず混亂せる

爾餘の諸敵艦も更に多大の損害を受けつゝ又其の針路を東方に採れり是に於て第一戰隊も亦一齊に右十六點に回頭し第二戰隊之に次ぎ追ぐるを追うて益々敗敵を掩撃し時々機を見て水雷發射をも試み爾後午後四時四十五分に至る迄、主隊の戰鬪に就ては別に著しき現象なく終始敵を南方に壓して砲撃を繼續したるに過ぎず、唯此の間壯烈の事蹟として特記すべきは、午後三時四十分の頃千早及び第五驅逐隊が並に午後四時四十五分の頃第四驅逐隊が敵の廢艦「スウォーロフ」に對し

ひ、第二戦隊も其の通跡を過ぎたる後正面を變じて之に續き再び敵を南方に擊壓して之を猛射す
午後三時七分に至りて敵艦「ジエムチウグ」は第二戦隊の後方に突進し來りしも遂に我が砲火に因
りて殆んど擊破せられ、すでに戦闘力を失ひたる「オスラービヤ」も同時十分に沈没し孤立せし
「スウォーロフ」は益々大破して其の一檔二煙突を失ひ全艦煙焰に包まれ操縦する能はず混亂せる

爾餘の諸敵艦も更に多大の損害を受けつゝ又其の針路を東方に採れり是に於て第一戦隊も亦一齊
に右十六點に回頭し第二戦隊之に次ぎ遁ぐるを追うて益々敗敵を掩撃し時々機を見て水雷發射を
も試み爾後午後四時四十五分に至る迄、主隊の戦闘に就ては別に著しき現象なく終始敵を南方に
壓して砲撃を繼續したるに過ぎず、唯此の間壯烈の事蹟として特記すべきは、午後三時四十分の
頃千早及び第五驅逐隊が並に午後四時四十五分の頃第四驅逐隊が敵の廢艦「スウォーロフ」に對し
勇敢なる水雷攻撃を決行したることにて、前者の奏効は確實ならざりしも、後者より發射せし一
水雷は敵艦の左舷後部に命中し、須臾にして艦體十度許傾斜するを見たり。此の兩回の襲撃中第
五驅逐隊の朝潮は附近敵艦より猛射せられ共に一彈を受けて一時危殆に陥りしも幸にして終に無
事なることを得たり。

午後四時四十分の比に至り、敵は北方に血路を開くを斷念せしにや、漸次南方に向つて遁走す
るものゝ如く、仍て我が主隊は第二戦隊を先頭とし、之を追撃せしが少時にして遂に敵影を煙霧
の裏に失し、南下すること約八海里、行々我が右方に離散彷徨せる敵の二等巡洋艦以下特務船等
を緩射し、午後五時三十分第一戦隊は再び針路を北方に執りて敵の主力を索め、第二戦隊は南西
方に折れて敵の巡洋艦隊に迫り、爾後日没に至るまで此の兩戦隊は分離して各別の行動を執り又
相見る能はざりき。

第一戦隊は午後五時四十分頃其の左方近距離に在りし敵の特務艦「ウラール」に一撃を加へて直
に之を擊沈し尙北方に索敵進航せる時左舷艦首に當り敵主力の殘艦約六隻の一群が北東に向ひ遁
走しつゝあるを發見し、直に近づき之と並航戦を再始し漸次敵の前方に出で、其の先頭を擊壓せ
しかば、敵は初め北東の針路を執りしも次第に南方に屈折し遂には北西に向針するに至れり、此
の並航戦は午後六時より日没迄連續し敵は大破の餘其の砲力減少せるに反し、我が沈著なる射撃
は益々其の威力を逞しうし「アレキサンドル三世」と見えたる敵艦は早く列外に出で、後方に落伍
し、先頭に占位せし「ポロチノ」型戦艦は午後六時四十分頃より大火災を起し、七時二十三分に到
り俄然爆煙に包まれて瞬時に沈没せり、蓋し火災の彈藥庫に及びしならんか、又當時南方に在り
て敵の巡洋艦隊を北方に追撃しつゝあり第二戦隊の諸艦は、已に傾斜して進退自在ならざる「ポ
ロチノ」型戦艦一隻が、午後七時七分敵艦「ナヒーモフ」の側に來り遂に顛覆沈没せるを目撃せり
後日捕虜の言に依り是れ即ち「アレキサンドル三世」にして第一戦隊の見たるものは「ポロチノ」な
りしを知るを得たり。

此の時、夕陽已に暮き我が驅逐隊艇隊は東南北の三面より漸次に敵に迫り已に襲撃準備の姿勢
を執れるを以て、第一戦隊は次第に敵に對する壓迫を弛めて日没(午後七時二十八分)と共に東方
に變針し、同時に本職は龍田をして全軍北航して明朝鬱陵島に集合すべしと電令せしめ、茲に當
日の晝戦を終結せり。

第三、第四戦隊及び第五、第六戦隊の戦況

午後二時戦闘開始の命下に第三、第四戦隊は孰れも我が主隊と分離し敵を左舷に見て反航南下

し、豫定戦策に準じて敵の後尾に占位せる特務部隊及び「オレーグ」、「アウローラ」、「スウェトラーナ」、「アルマーズ」、「ドンスコイ」、「モノマーフ」等の巡洋艦を脅威迫撃せり、第三及び第四戦隊は終始共同連繫して午後二時四十五分より先づ敵の巡洋艦隊に對して反航戦を開始し、漸次敵の後尾を旋撃して其の右方に出で更に並航戦を試み爾後優速を利用し機宜我が正面を變じて或は敵の左に現れ又は其の右に廻り攻撃を持續すること約三十分にして、敵の後方部隊は漸次に動搖潰亂し、其の特務艦船の如きは遂に左往右往して爲す所を知らざるの狀態に陥れり、此の間午後三時を過ぐる頃「アウローラ」と見えたる敵艦單獨敵中より突進し來りしが我が猛射に多大の損傷を負うて撃退せられ又午後三時四十分頃突撃し來りたる敵の驅逐艦も爲す所なくして撃攘せられたり。

第三、第四戦隊協力攻撃の効果は午後四時の交に及んで著しく發展し敵の後方部隊は全く潰亂して個々に分裂し其の諸艦船皆多少の損害を受けたるものゝ如く、特務艦船中には既に操縦の自在を缺くものあるを見るに至れり、第四戦隊は午後四時二十分頃三檣二煙突を有する敵の特務艦一隻(或は「アナヅイリ」ならん)が一方に孤立するを認め直に近づきて之を撃破し次で四檣一煙突の特務艦(或は「イルツイシ」ならん)を猛射して殆ど之を撃破せり、此の頃より第五、第六戦隊も來り加り第三、第四戦隊と協同して共に潰亂せる敵の巡洋艦及び特務艦船を掩撃しつゝありしが午後四時四十分の頃北方より我が主隊に撃壓せられたる敵の戦艦(或は海防艦)四隻南下し來りて其の巡洋艦に合力せしかば第四、第五戦隊の如きは少時近距離に於て之と對戦するの苦戦に陥り、何れも多少の損害を受けしも幸に大ならざることを得たり。

是より先き第三戦隊の旗艦笠置は其の左舷炭庫水線下に一弾を被りしが、爾來浸水漸く増加し其の應急修理の爲め波靜なる處に行くの已むを得ざるに至り、出羽司令官其の麾下新高、音羽の二艦を一時瓜生司令官の指揮に屬し自ら笠置、千歳を率ゐて午後六時油谷灣に赴き、其の將旗を千歳に移し夜に入りて出發北航せしめ笠置は修理に時間を要し遂に翌日の追撃戦に参加する能はざりき、又第四戦隊の旗艦浪速も後部水線に敵弾を被り爲に午後五時十分頃同戦隊は一時避戦して其の損傷の應急修理を爲せり。

是の時に當り敵は南北兩方面に全軍潰亂滅亂の悲境に在りしを以て午後五時三十分の比第二戦隊が我が主隊と分離して此の方面に來り南方より敵の巡洋艦を追撃すると同時に敵は群をなして悉く北方に遁走し、第四、第五、第六戦艦も共に之を追撃せしが其の途上に於て既に進退の自由を失せる敵の廢艦「スウオーロフ」及び工作船「カムチャーツカ」を發見し第五、第六戦隊は直に其の撃滅に轉じて午後七時十分「カムチャーツカ」を撃沈し、次で第五戦隊に隨伴せる第一艇隊は突進して「スウオーロフ」を襲撃し同隊は尙後尾の小砲一門を以て最終の抵抗を試みしも遂に我が水雷二發の下に沈没せり、時に午後七時二十分なり、幾もなく此等の諸戦隊は鬱陵島集合の電令に接し何れも戦を止めて北方に向針せり。

各驅逐隊及び水雷艇隊の戦況

二十七日の夜戦は晝戦の終結後直に各驅逐隊及び水雷艇隊に依り猛烈果敢に開始せられたり、

此の日朝來西南の強風波を上ぐるごとく高く小艇の操縦大に困難なるを認め、本職が直率せし水雷艇隊の如きは晝戦開始に先だち悉く三浦灣に避泊せしめたる程にして、夕刻に至り風較和ぎしも浪尙靜らず洋中の水雷攻撃は我に不利少からざるの状況なりき、而も各驅逐隊及び艇隊は此の一遇の時機を失するを恐れ皆風濤を冒して日没前には來り合して、各先を争うて敵に近づき第一驅逐隊は北方より第二驅逐隊及び第九艇隊は北東方向より敵主力の先頭を壓し、第三驅逐隊は東方

雷二發の下に沈没せり、時に午後七時二十分なり、幾もなく此等の諸戦隊は鬱陵島集合の電令に接し何れも戦を止めて北方に向針せり。

各驅逐隊及び水雷艇隊の戦況

二十七日の夜戦は晝戦の終結後直に各驅逐隊及び水雷艇隊に依り猛烈果敢に開始せられたり、此の日朝來西南の強風波を上ぐるこ高く小艇の操縦大に困難なるを認め、本職が直率せし水雷艇隊の如きは晝戦開始に先だち悉く三浦灣に避泊せしめたる程にして、夕刻に至り風較和ぎしも浪尙靜らず洋中の水雷攻撃は我に不利少からざるの状況なりき、而も各驅逐隊及び艇隊は此の一遇の時機を失するを恐れ皆風濤を冒して日没前には來り合して、各先を争うて敵に近づき第一驅逐隊は北方より第二驅逐隊及び第九艇隊は北東方向より敵主力の先頭を壓し、第三驅逐隊は東方より第五驅逐隊は南東より其の後尾に迫り、又第一、第十、第十五、第十七、第十八艇隊等は南方より敵の主力部隊及び其の左後に並航せる巡洋艦の一群に追尾し、日没の頃次第に三面包围の形勢を成せり、敵は此勢威に屈したるにや、日没後倉皇南西に避け、更に東方に變針したるもの如く、午後八時十五分第二驅逐隊が第一撃を敵主力の先頭に加へたるを始めとし各驅逐隊一時に突進して敵の周圍に蝟集し、午後十一時頃に至る迄連續激烈なる肉薄襲撃を決行したり、敵は日没より探照砲火を以て極力防戦せしも遂に此の攻撃に耐へず其の僚艦相失して四分五裂の状態となり、各血路を求めて任意に運動せしかば、我が襲撃隊の追蹕と共に茲に一場の大混戦を現出し少くも敵の戦艦「シツイウエリーキー」、装甲巡洋艦「ナヒトモフ」及び「モノマーフ」の三隻は此の間我が水雷に罹りて全く其の戦闘航海力を失ひ、又我が軍に於ても第一艇隊の第六十九號艇(司令艇)、第十七艇隊の第三十四號艇(司令艇)及び第十八艇隊の第三十五號艇の三隻は襲撃の際敵彈の爲に撃沈せられ、驅逐艦春雨、曉、雷、夕霧、並に水雷艇鷲、第六十八號、第三十二號等は敵彈又は衝觸等の爲めに多少の損害を被り、爾來一時戦闘に参加し難く、死傷も亦比較的少しとせず、就中第一、第十七及び第十八艇隊の死傷最も多し、但沈没水雷艇三隻の乗員は友艇雁、第三十一號及び第六十一號等に依り救助收容せられたり、後日捕虜の言を聞くに當夜水雷攻撃の猛烈なりしは殆ど言語に絶し、我が艦艇連續肉薄し來るを以て其の應接に遑無く、且其の距離餘りに近きが爲め備砲俯角の度を過ぎて照準する能はざりしと云ふ。

右記せるもの、外第四驅逐隊及び爾餘の水雷艇隊は當夜多方面に索敵せしが第四驅逐隊は二十八日午前二時の頃韓崎の北東微東約二十七海里の地點にて敵艦二隻の北走するを發見し直に之を襲撃して其の一隻を轟沈せり、後日捕虜の言に依れば撃沈せられたる此の敵艦は「ナワリン」にして同艦は兩舷に連續一發宛の水雷命中し少時にして沈没せりと云ふ、爾餘の諸艇隊は終夜各方面を搜索せしも遂に獲る所なかりき。

二十八日の一般戦況

二十八日の黎明前日來の濛氣拭ふが如く、第二戦隊は既に鬱陵島の南方約二十海里に達し、爾餘の諸戦隊並に前夜の襲撃を果したる各驅逐隊等も各航路を異にして、順次後方より集合の途上に在り、午前五時二十分本職は敵の退路を遮斷する爲め麾下巡洋艦隊を以て東西に搜索列を張りしめんとする際、我が後方約六十海里に占位して北進しつゝありし第五戦隊は早くも敵影を發見して東方に當り敵艦の煤煙數條あるを警報す、幾もなく同戦隊は敵に近づき又報じて曰く敵は戦

艦四隻(後に至り二隻は海防艦たるを知る)巡洋艦二隻より成り、今北東に向針すと、是れ間はずして殘敵の主力たるや明なり、是に於て第一、第二戰隊は其の針路を反轉し、漸次東方に向ひて敵の前路を扼し第六、第四戰隊も亦第五戰隊に合して敵の後方を抑へ午前十時三十分の頃竹島の南西約十八海里の地點に於て全く此の敵を包圍せり、敵は即ち戰艦「ニコライ一世」、「アリオール」、海防艦「アブラクシン」、「セニャーウキン」及び巡洋艦「イズムルード」の五隻にして他の一隻の巡洋艦は遙に南方に後れて當時其の影を失す、固より敗餘の敵艦已に多大の損害を負へるのみならず、我が優勢に抵抗し得べきにあらざれば、第一、第二戰隊が先づ砲火を開くや須臾にして敵艦隊司令官ネボガトフ少將は其の部下と共に降意を表し、本職は特に其の將校以上に帶劍を許して之を受けたり、然るに敵艦「イズムルード」のみは降伏に先だち其の快速を以て南方に逃れ我が第六戰隊に遮られて又東方に走れり、此の時油谷灣より急航したる千歳も、其の朝途上に於て敵の驅逐艦一隻を撃沈したる後、此の地に來り會し直に轉じて「イズムルード」に追尾せしが、遂に及ばずして之を北方に逸せり。

是より先き第四戰隊が北航の途上にあるとき、午前七時の頃西方に一隻の敵影を發見し音羽、新高の一小隊は有馬音羽艦長の指揮下に之が撃滅の爲め分派せられしが、同隊は午前九時に至りて漸く敵に近接し、其の敵艦「スウェトラナ」が一驅逐艦を伴へるものなるを知り、益々之を追窮し戰鬪約一時間の後午前十一時六分竹邊沖に於て全く「スウェトラナ」を撃沈し、尙新高は其の時來會したる驅逐艦叢雲と共に殘れる敵の驅逐艦「ブイツルイ」を追撃し午前十一時五十分遂に之を竹邊灣の北方約五海里の無名灣に擱岸破滅せしめたり、而て右二敵艦の生存乗員は我が特務艦阿米利加丸及び春日丸に依りて悉く救助收容せられたり、敵の降服を受けたる聯合艦隊の大部は尙其の地附近に漂泊して敵艦四隻の捕獲處分に從事しつゝありしが、午後三時頃南方より敵艦「ウシヤークフ」の來るを發見し磐手、八雲の一隊は直に之に向ひ午後五時過其の南走するに追及して先づ降伏を勸告せしも之に應ぜず却て彼より砲火を開きしかば止むを得ず砲撃して遂に之を撃沈し、其の生存者約三百餘名を救助收容せり、又驅逐艦漣及び陽炎は午後三時三十分の頃鬱陵島の南西約四十海里に於て東方より遁走し來る敵の驅逐艦二隻を發見し、極力之を北西に追躡し午後四時四十五分追及して戰鬪を開始せしに敵の後續驅逐艦は白旗を掲げて降意を表せり、仍て漣は直に之を捕獲せしに此驅逐艦は「ベドウィ」にして敵艦隊司令長官ロジエストウエンスキー中將及び其幕僚の移乗し居るを知り其乗員と共に之を捕虜とせり、尙陽炎は他の驅逐艦を追撃し午後六時三十分及びびしも遂に之を北方に逸せり、又午後五時頃西方に索敵したる第四戰隊及び第二驅逐隊は敵艦「ドンスコイ」の北走するを發見し之を追尾して午後七時鬱陵島の南方約三十海里に至りし頃恰も好し竹邊灣方面より來會しつゝありし、音羽、新高の一隊並に驅逐艦朝霧、白雲吹雪等は既に西方より敵に迫りて砲撃を開始し第四戰隊と共に之を挾撃するの好位を制し左右相須つて日没後迄之を猛撃し殆ど敵を撃破し得たるも未だ撃沈するに至らずして遂に夜に至り其影を失せり、此の砲撃中止と共に吹雪及第二驅逐隊等連續之を襲撃し其効果不明なりしも、翌朝に

至り「ドンスコイ」は鬱陵島の東南島岸に漂ひ遂に沈没したるを發見せり、而て同島に上陸したる其生存者六百餘名は春日、吹雪等にて救助收容せられたり。

聯合艦隊の大部が北方追撃の戦果を收むるに汲々たりし際、南方前日の戰場に於ても亦相應の殘獲ありたり、此の日の早朝戰場掃除の任務を持って出發したる特務艦信濃丸、臺南丸及び八幡丸は韓崎の北東約三十海里の地點に於て敵艦「シンイ・ウエリーキー」が前夜の水雷攻撃に傷き將

に至りし頃恰も好し竹邊灣方面より來會しつゝありし、善羽、新高の一隊並に驅逐艦朝霧、白雲吹雪等は既に西方より敵に迫りて砲撃を開始し第四戰隊と共に之を挾撃するの好位を制し左右相須つて日没後迄之を猛撃し殆ど敵を撃破し得たるも未だ撃沈するに至らずして遂に夜に至り其影を失せり、此の砲撃中止と共に吹雪及第二驅逐隊等連續之を襲撃し其効果不明なりしも、翌朝に

至り「ドンスコイ」は鬱陵島の東南島岸に漂ひ遂に沈没したるを發見せり、而て同島に上陸したる其生存者六百餘名は春日、吹雪等にて救助收容せられたり。

聯合艦隊の大部が北方追撃の戦果を収むるに汲々たりし際、南方前日の戦場に於ても亦相應の残獲ありたり、此の日の早朝戰場掃除の任務を持って出發したる特務艦信濃丸、臺南丸及び八幡丸は韓崎の北東約三十海里の地點に於て敵艦「シソイ・ウエリーキー」が前夜の水雷攻撃に傷き將に沈没せんとするを發見し、之が捕獲の手續を了して其の乗員を救助收容せり、而て該艦は午前十一時五分遂に沈没したり、又驅逐艦不知火、特務艦佐渡丸も午前五時三十分頃對馬琴崎の東方約五海里に於て敵艦「ナヒーモフ」が沈没に垂んとせるに會し又敵艦「モノマーフ」が著しく傾斜して其の附近に來るを發見し何れも佐渡丸にて捕獲處分を爲せしが、二艦共に大破して浸水甚しく遂に其の乗員を救助し得たる後午前十時の頃前後して沈没せり、其の時又敵の驅逐艦「グロームキー」も此の附近に來りしが、俄に北方に遁逃せしを以て不知火は直に追撃して蔚山沖に至り午前十一時三十分水雷艇第六十三號と協力攻撃し、敵砲の沈黙するに及んで之を捕獲し、其の生存乗員を捕虜とせり、該艦も亦大破して遂に午後零時四十三分に沈没したり、其の他麾下砲艦特務艦等にて戦後戰場附近の沿岸等を搜索して救助收容し得たる撃沈敵艦の乗員少からず、戦利艦五隻の捕虜と合して其の數殆ど六千に達す。

以上は五月二十七日午後より翌二十八日午後に亘れる海戦の經過にして、其の後當隊の一部は尙遠く南方に敵を搜索せしも遂に又其の隻影を見ず、日本海を通過せんとせし敵艦隊約三十八隻にして、我が撃滅又は捕獲に洩れたりと認むるもの巡洋艦驅逐艦及特務艦各數隻に過ぎず、而して此の二日間の戦鬪に於て我が艦隊の失ひたる所は水雷艇三隻のみにして、其の他多少の損害を被りたるものあるも一として今後の任務に支障あるもの無し、又死傷は全軍を通じ將校以下戦死百十六名負傷五百三十八名にして其の細別は別に報告せるが如し(細別報告略)。此の對戦に於ける敵の兵力我と大差あるにあらず敵の將卒も亦其の祖國の爲めに極力奮闘したるを認む、而も我が聯合艦隊が能く勝を制して前記の如き奇蹟を收め得たるものは一に

天皇陛下御稜威の致す所にして固より人爲の能くすべきにあらず、特に我が軍の損失死傷の僅少なりしは歷代神靈の加護に由るものと信仰するの外無く、曩に敵に對し勇進敢戦したる麾下將卒も皆此の成果を見るに及んで唯感激の極言ふ所を知らざるものゝ如し。

振古未曾有の大捷、天聽に達するや、五月三十日東郷聯合艦隊司令長官に左の勅語を賜つた。

聯合艦隊ハ敵艦隊ヲ朝鮮海峡ニ邀撃シ奮戦數日遂ニ之ヲ殲滅シテ空前ノ偉功ヲ奏シタリ

朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懌フ惟フニ前途ハ尙遠遠ナリ汝等愈ヨ奮勵

シテ以テ戦果ヲ全フセヨ

皇后宮大太子爵香川敬三は、三十一日皇后陛下の令旨を傳へた。

聯合艦隊ハ敵ノ艦隊ヲ朝鮮海峡ニ邀撃シ勇進奮闘日夜激戦殆ト全滅ニ至ラシメタル趣

皇后陛下ノ懿聞ニ達シ將校下士卒ノ忠勇剛銳克ク偉大ノ功績ヲ奏シタルヲ深ク御感賞アラセラ

ル
皇太子殿下よりも、同日令旨を賜つた。

日本海ノ大海戦ニ於テ敵ノ艦隊ヲ殲滅シ曠古ノ大捷ヲ奏シタル聯合艦隊ノ偉功ヲ嘆尚ス
優渥なる勅語を拜して、東郷司令長官は、三十一日奉答文を捧げ奉つた。

日本海ノ戦捷ニ對シ特ニ優渥ナル

勅語ヲ賜ハリ臣等感激ノ至リニ堪ヘス此海戦豫期以上ノ成果ヲ見ルニ至リタルハ一ニ
陛下御稜威ノ普及及ヒ歴代

神靈ノ加護ニ依ルモノニシテ固ヨリ人爲ノ能クスヘキ所ニアラス臣等唯益々奮勵シテ犬馬ノ勞
ヲ盡シ以テ皇謨ヲ翼成センコトヲ期ス

皇后陛下の令旨に對し奉りては、次の奉答文を捧げた。

日本海ノ戦捷ハ一ニ

天皇陛下御稜威ノ致ストコロ然ルニ特ニ優渥ナル 令旨ヲ賜ハリ誠ニ感激ノ至リナリ尙愈々奮
勵 令旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス

皇太子殿下の令旨に對し奉りては、次の奉答文を捧げた。

天皇陛下ノ御威德ニ由リ聯合艦隊カ日本海ニ敵艦隊ヲ擊滅シ得タルニ對シ特ニ優渥ナル 令旨
ヲ賜ハリ感激ノ至リニ堪ヘス愈々精勵努力 令旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス

凱旋入京

日本海々戰に於て、露國海軍は徹底的にやられて了うた、之れがため最早戰爭を續ける望みも絶え
た。而も陸上にては奉天に於ても大敗したから、米國大統領の調停によりて日露講和談判が開かれ、

九月五日講和條約文を作成し、各々批准を奏請して、十月十六日條文公布となつた。

東郷司令長官は、聯合艦隊を率ゐ、佐世保に至つたが、十月八日、東京灣に凱旋すべきの内命に接
して、艦隊は同港を出發し、伊勢灣に入り、東郷司令長官は上村、片岡、出羽の三司令長官及び三須
山田の二司令官其他の幕僚を從へて、津に上陸し、十月十九日、皇大神宮に參拜し、更に豐受大神宮
を參拜して、神助を拜謝し、戦捷を奉告した上、艦隊を率ゐて、同二十日横濱沖に凱旋し、二十二日
入京して、直に登營、龍顏を拜して、海戦の經過を奏上した。

歡感殊に斜ならず、優渥なる勅語を賜つた。東郷司令長官以下は、東溜間に退いて、恩賜の酒饌を

頂き、宮城を退下したる後、海軍省に赴き、山本海相、伊東軍令部長以下大本營幕僚等と、階上の一
堂に會して戦勝を祝した。

尋で十月二十三日横濱沖に於て、凱旋觀艦式が舉行され、艦隊百六十五隻、海上に列をなして、甚
だ盛觀を極めた。

入京して、直に登壇、龍顔を拜して、海戦の経過を奏上した。

歡感殊に斜ならず、優渥なる勅語を賜つた。東郷司令長官以下は、東海間に退いて、恩賜の酒饌を

頂ぎ、宮城を退下したる後、海軍省に赴き、山本海相、伊東軍令部長以下大本營幕僚等と、階上の一
堂に會して戦勝を祝した。

尋で十月二十三日横濱沖に於て、凱旋觀艦式が舉行され、艦隊百六十五隻、海上に列をなして、甚
だ盛觀を極めた。

十月二十七日、聖上、濱離宮へ行幸、聯合艦隊の士官候補生以上、並に大本營幕僚、及び職員に宴
を賜ひ、翌二十八日、同離宮に於て、皇太子殿下の賜宴があつた。更に同月二十四日に東京市の歡迎
があり、公私の歡迎は數々あつたが、東郷司令長官は、戦死將卒のために、二十九日盛大な祭典を青
山墓地に於て舉行した。

十二月二十日、聯合艦隊の編制解かれ、二十一日、東郷長官は、其解散式を旗艦朝日にて擧げ、
互に告別の辭を述べて式を終つた。

渡英渡米

明治三十八年十二月二十日、東郷大將は海軍令部長となり、實戦上の勝利者は、爾來帷幕に於て
策を廻らす事となつた。此軍令部長時代に、所謂八ヶ艦隊を以て、我守勢的國防の最小限度とすべし
との議を定めたのであつた。三十九年四月一日、明治三十七八年戦役の功によりて、功一級金鷄勳章
並に年金千五百圓及び大勳位菊花大綬章を授賜せられ、九月二十一日には特に華族に列し、伯爵を授
けられた。

明治四十年十月、東宮殿下韓國御渡航の御事あるや、東郷大將は其供奉を仰付けられ、四十四年二
月、東伏見宮依仁親王、同妃殿下の、英國皇帝戴冠式に御参列なるについて、東郷大將は乃木大將と
共に隨行を仰付けられた。

之れよりさき明治四十二年十一月、東郷大將は、軍令部長を罷め、軍事参議官に補せられてゐた、
乃木大將も亦同職であつた。四十四年四月十二日、殿下の御乗船賀茂丸は横濱を解纜したが、東郷、
乃木兩大將も之れに御同乗申してゐた。六月七日、賀茂丸はテムス河のチルベリー沖に投錨し、こ
こから上陸、六月二十二日の戴冠式に、御名代官殿下に隨うて参列した。

四十年の昔を偲んで、ウイスターを訪問し、ウイスター協會の晩餐會に臨んで、無言提督には珍ら

しい長演説をやつた。この世界的偉人の渡英は到る所に歓迎されて、殆んど寧日なしといふ有様であつた。

英國よりの歸路は、北米合衆國を訪問し、紐育に、華盛頓に、シヤトルに、到る所で歓迎をうけ、八月二十八日、シヤトルから丹波丸に乗つて、横濱に歸着した。

東宮御學問所總裁

大正二年四月二十一日、東郷大將は、恩命を以て、元帥府に列せられ、特に元帥の稱號を賜ふ、時に六十七歳、海軍に出仕してよりこゝに四十四年であつた。

然るに、元帥は渡米の頃から氣分がすぐれず、いろ／＼名醫に診て貰つたら、漸く膀胱結石とわかつた。之れによりて、大正二年十一月、東京大學病院に入院して大手術をうけた。

大正三年四月一日、東宮御學問所の新設せらるゝや、元帥は其總裁を仰付けられた。同時に波多野東宮大夫は同副總裁に、海軍大佐子爵小笠原長生は同幹事に、陸軍大將子爵大迫尙敏、理學博士山川健次郎、陸軍少將河合操、海軍少將竹下勇は同評議員に仰付けられた。同月九日、文學博士白鳥庫吉以下五名に御學問所御用掛を仰付けられ、爾來大正十年三月の、御學問所御閉鎖に至るまで、時々職員が任命があつたが、東郷總裁は終始之れを統轄して、東宮殿下御輔導の大任を全うした。

大正十年三月一日、御學問所御閉鎖の砌、特に御物なる御紋章散し太刀造り三條吉則の名刀を賜はり、七年間の勞苦を犒らはせ給ふた。更に大正十五年十一月十一日、國家の最高勳章なる、菊花章頸飾を賜つた。

病篤し

昭和九年五月二十七日は、東郷元帥に取つては最も因縁深き、日本海々戰の第二十九回海軍記念日であつた。毎年の記念日には必ず出席せらるゝのであつたが、昨秋來兎角氣分すぐれず、其爲此日は出席を見合せて日常よりも幾分早目に來診した加藤主治醫の診察をうけて軽い朝食を攝り、靜かな奥の八疊の間のガラス戸越しに、庭の新緑を眺めてゐたが、午前十一時四十五分、大元帥陛下が祝賀會

場へ御着の時刻になると床上に容を正して默拜し、祝賀會終了後海軍省から大元帥陛下が天機麗しく還幸遊ばされ祝賀會が盛會裡に終了した由の報告があり、これを副官の林少佐が元帥に知らせると、心から嬉しさうにうなづいて默想してゐた。又例年の通り早朝から上六小學校の生徒や東郷會の人々が元帥邸に御祝ひに來たが、今年元帥の姿が見られず何れも元帥の健康回復を祈つて引あげて行つ

であつた。毎年の記念日には必ず出席せらるゝのであつたが、昨秋來兎角気分すくれず、其爲此日は出席を見合せて日常よりも幾分早目に来診した加藤主治醫の診察をうけて軽い朝食を攝り、靜かな奥の八疊の間のガラス戸越しに、庭の新緑を眺めてゐたが、午前十一時四十五分、大元帥陛下が祝賀會

場へ御着の時刻になると床上に容を正して黙拜し、祝賀會終了後海軍省から大元帥陛下が天機麗しく還幸遊ばされ祝賀會が盛會裡に終了した由の報告があり、これを副官の林少佐が元帥に知らせると、心から嬉しうなづいて黙想してゐた。又例年の通り早朝から上六小學校の生徒や東郷會の人々が元帥邸に御祝ひに來たが、今年は大元帥の姿が見られず何れも元帥の健康回復を祈つて引あげて行つた。

然るに同日午後に至りて、病勢悪化してすこぶる心痛すべき状態に陥つた。海軍省では國府田醫務局長等が首脳部と協議の結果、同日午後六時左の如く容體を發表した。

【海軍省發表】 東郷元帥には昨年夏頃より發病秋期に至り時々咽喉部に異物感及び輕痛ありその後一進一退の状況にて喉頭癌の診斷の下に放射線療法その他の治療を施しつゝあるも老體に加ふるにその間時々宿痼たる膀胱結石、坐骨神經痛を起し又氣管支炎等を併發せるを以て衰弱加はり昨今心痛すべき状態にあり

【二十七日午後九時、福井軍醫大佐發表】 二十七日午前十時五パーセントのブドウ糖溶液五百グラム及び強心劑皮下注射、食餌は重湯五十グラムのほか咳嗽のため攝取不可能、午後九時の容體は體溫三十五度五分、脈搏百二十、呼吸三十

【二十八日午前一時半の容體】 午前一時二十分加藤主治醫が二回にわたり酸素吸入をかけたがこゝ二三日が最も警戒を要する

之れを聞いた上下は痛き衝動にうたれた。聖上陛下にはこの日海軍經理學校の海軍記念日式典の席上に於て、大角海相より東郷元帥の容體を聽召されて、有難き御下問を賜つた趣に拜承するが、同日午後容體悪化の旨が夕刻海軍省より宮内省に公式に報告あり、當番侍従がこの旨直に奏上したところいたく御軫念あらせられ午後七時御見舞として果物を下賜あそばされた。伏見軍令部總長宮殿下には御附武官を同夜七時頃同邸に差し遣はされ御見舞品を届けさせられ、又閑院參謀總長宮殿下には同夜十時五分特に泉名副官を差遣はされ、御見舞あらせられた。

東郷元帥病篤しの報は、我邦朝野のみでない、廣く世界の人々を驚かしめた。之れがため東郷邸への見舞客、訪問文書、電報の來る事は夥しく、中には熱誠をこめて其病氣の平癒を祈る篤志者も多々數へられた。併し元帥の容體は刻々悪くなつてゐた。

【二十八日午前十時海軍省發表】 體溫三十六度三分、脈搏一一八(時々結滯)、呼吸二六、昨夜安眠せらる、食餌攝取依然困難なるも今朝陛下御下賜の果汁を一口有難く頂戴さる、意識明瞭

【午後二時發表】 午前十一時ブドウ糖リンゲル液八〇〇グラムを皮下注射、體溫三七・一、脈搏

一一〇、結滯やゝ多し、呼吸二六、意識明瞭、食餌は今朝來果汁一口、くず湯一〇グラム、アイスクリーム少量

【午後十一時の容體】 一〇パーセントの葡萄糖液五〇グラム靜脈に注射す、體溫三六度五、脈膊一二〇、呼吸二八、目下安眠を續けてゐるが、時々脈膊結滯す(福井軍醫大佐非公式發表)

【二十九日午前一時半非公式發表】 體溫三六度七、脈膊一二六、時々結滯、呼吸三二、食餌全くなし

【午前九時海軍省發表】 體溫三七度一、脈膊一二六稍々弱く時々結滯、呼吸三二、食餌アイスクリーム少量

【午前十一時、小笠原長生子の非公式發表】 午前十一時葡萄糖液注射、體溫三七度三、脈膊一二〇、緊張弱く時々結滯、呼吸三十、食餌は今朝來アイスクリーム、葛湯少量

【午後一時海軍省公表】 午前十一時等張葡萄糖液二百グラム注射、午後一時の容體、體溫三七度一、脈膊一二〇、微弱時々結滯、呼吸三四

【午後十時發表】 體溫三七度八、脈膊一三八微弱、整はず、呼吸四〇淺表(淺い呼吸)時々深長、不整の呼吸を交へ口唇チヤノーゼ(紫斑)加はる、意識やゝ混濁

【午後十一時發表】 體溫三七度九、脈膊一四〇、細小軟弱、呼吸四二、著しく淺表不整、意識不明、悪化す

【三十日午前零時小笠原長生子發表】 體溫三七度九、脈膊一四四、呼吸四六、脈は非常に細小で著しく不整で依然として憂慮すべき状態にある

【午前一時半發表】 體溫三七度五、脈膊一四六、呼吸四六、脈膊著るしく微弱、呼吸不整、意識混濁し依然重篤の状態を持續せらる(以上林高級副官非公式發表)

酸素吸入を持續、滋養浣腸、カンフル注射等その他一切の手當をつくしつゝあり、諸博士等の智慧をしばつて出来るだけの手當をつくしたがつひに意識混濁となられた(福井軍醫大佐談)

【午前二時半發表】 體溫三七度二、脈膊一四二、著るしく微弱結滯、呼吸四九、淺表四肢厥冷し一般状態次第に増悪す、酸素吸入カンフル注射等を持續す(福井軍醫大佐談)

元帥の病狀について、小笠原長生子爵は、二十八日午後八時半語りて曰く、昨年十二月二十五日東大増田教授により喉頭痛の診斷確定し手術不可能なるため、本年一月七日ラヂウム療法をするといふ事を元帥から承認を得て、翌八日から東大醫學部放射線科主任中泉助教、海軍軍醫學校レントゲン科教官横倉軍醫中佐が日曜日も缺かさず、毎日加藤主治醫の立會の上ラヂウム療法につとめた、ラヂウムによる治療方法は昨年中藤村義朗男の食道癌に試みた外、今回が日本では第二回目である。ラヂウム療法は海軍病院、大學病院でも出来るだけの研究をした結果、元帥の治療にも用いたもので、東京市立病院でも出来るだけ便宜を與へてくれた。元帥の病氣に使用したラヂウムの分量は千三百ミリ

グラムに達しその價格は三十五萬圓に及んでゐる。その間毎週一回帝大増田教授、荒木醫師及び西川侍醫が治療を援助した。其結果局所的にも全身的にも非常な好結果であつた。三月十八日に至るまでにラヂウムの治療を行ふ事五十九回、ラヂウムの線量が六萬三千ミリグラム時に及び局所的に非常に輕快に向つたのであるが、不幸にしてこの頃より膀胱結石、坐骨神經痛、氣管支炎を併發し、ラヂウ

ウム療法は海軍病院、大學病院でも出来るだけの研究をした結果、元帥の治療にも用いたもので、東京市立病院でも出来るだけ便宜を興へてくれた。元帥の病氣に使用したラヂウムの分量は千三百ミリ

グラムに達しその価格は三十五萬圓に及んでゐる。その間毎週一回帝大増田教授、荒木醫師及び西川侍醫が治療を援助した。其結果局所的にも全身的にも非常な好結果であつた。三月十八日に至るまでにラヂウムの治療を行ふ事五十九回、ラヂウムの線量が六萬三千ミリグラム時に及び局所的に非常に輕快に向つたのであるが、不幸にしてこの頃より膀胱結石、坐骨神經痛、氣管支炎を併發し、ラヂウム療法を一時中止のやむなきに至つた。これ等の併發症が漸次快方に赴くに從つて再びラヂウム療法を行つたのであるが、今日も既に約二十七分間にわたりラヂウム療法を行つた云々。

侯爵・從一位

畏き邊にては、元帥の國家に對する勳功を嘉みせられ、九月二十九日午後零時半、陸軍の御沙汰があつた。この思召を拜した令息彪氏は同時刻宮内省に出頭、湯淺宮相より侯爵の爵記を拜受した。

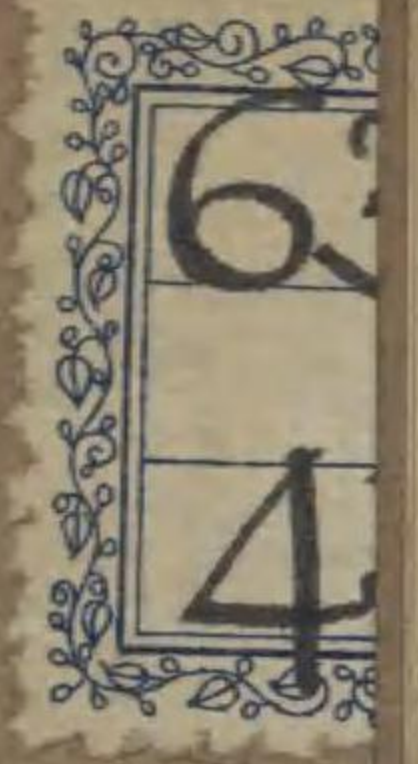
正二位大勳位功一級伯爵 東郷平八郎

依勳功特陞侯爵

午後零時半令息彪氏が宮内省に出頭して湯淺宮相から有難き聖旨の傳達方を受け假爵記を拜受し、さらに同三時すぎには二男の海軍中佐實氏が參内、宮相からあらためて爵記を拜受した。爵記は令息彪氏が捧げて百合子夫人や二男實中佐、令嬢園田八千代夫人の四人がならんで元帥の病室にはいつた彪氏が元帥の枕頭に恭しく爵記をさへげて有難き恩命を傳へたところ白いひげがのび、やせほぐけた元帥の顔にも生氣が見え、やがて眼頭には白いものが光つた。彪氏の談によると、「有難い御沙汰を拜し元帥を始め私共一同只々感激の外ありません、病床の父に傳へますと床の上に端座が出来ないのが如何にも残念さうに小さい聲で「感激に堪へません」と感涙にむせんでゐました」云々。

又小笠原子爵は感激して「宮内省から、午後零時半お召あり彪君が參内しまして侯爵に陞爵される事になり、之を持參して歸宅し、ついで彪、實兄弟は揃つて西川侍醫に伴はれ午後一時十分病室において元帥に恩命を傳へました、元帥は感激し袴羽織を蒲團の上にかけて感涙にむせばれました」云々。

尋で、病革まるや、畏き邊りでは其危篤の趣聽召されて、重ねて元帥生前の勳功を嘉せられ、三十日午前九時半特旨を以て從一位陞叙の有難き御沙汰あらせられた。



元帥海軍大將正二位大勳位功一級侯爵 東郷平八郎

叙 従一位 (特旨を以て位一級被進)

重ねての有難き御沙汰に、侯爵家からは小笠原子が代理で宮内省に出頭、湯淺宮相から位記を拜受退下した。

薨 去

昭和九年五月三十日午前七時、東郷元帥は遂に薨去された。薨去迄の發表は、

【三十日午前六時發表】 體溫三八四、脈搏一五二、軟小呼吸五二、嗜眠状態に陥り、瞳孔反應鈍弱、心音微弱なり、四肢厥冷し冷汗あり、一般状態憂慮にたへず(小笠原長生子爵非公式發表)

【午前六時十五分發表】 脈搏算し難し、未だ僅かに呼吸あり

【午前六時四十分海軍省公表】 六時二十五分全く危篤

三十日午前六時瞳孔に反應を失つた元帥はもはや最期の時に近づく、奥八疊日本間の病室に親族一同が呼びこまれ、大角海相も駆けつけて部屋に通された、元帥の枕に近く右に嗣子彪氏、次男實氏、加藤主治醫、島蘭博士と並んだ、その後大角海相、小笠原子が氷塊のやうに正座した、二女園田男夫人八千代子さん、令孫達は裾の方に一かたまりとなつて老元帥の最期を見守る、元帥の右の手を靜かにとつてゐるのは加藤主治醫である、床の間に安置された爵記をさめた桐箱、大正天皇が皇太子殿下の御時、元帥に御下賜遊ばされた軍刀作りの一文字吉房、御下賜の葡萄酒も枕許に飾られて元帥の最期は君寵の光榮を頂きつゝある、午前六時二十五分加藤主治醫は眉に憂愁をうかべた、元帥が全く危篤に陥つたのであつた。先刻八疊の茶の間から元帥の病室に運ばれた病夫人はベツトに横たはつたまゝ腫をそゝいでゐる。加藤主治醫の眼が異様にかゞやき「御臨終です」。嗚咽の聲が誰からともなく漏れた、彪氏が靜かに動いて夫人の手によつてしめされた綿を箸にとり元帥の唇に末期の水がしめされた。午前七時である「大往生で御座いました」加藤主治醫は男泣きに泣いた。斯て元帥は永久の沈黙に陥つたのである。

元帥の葬儀は國葬を以て昭和九年六月五日、日比谷葬場に於て行はれた。國を擧げて哀悼す。同夜多磨墓地へ斂葬し、世界的偉人は永へに安らかに眠る。

天皇 年 號 支 千 皇 紀 年 紀 事 項

皇天明孝		皇天	
弘化四 未	二五〇七 一八四七	嘉永元 申	二五〇八 一八四八
一歲	十二月二十二日薩摩國鹿兒島郡加治屋町の邸に生る名を仲五郎と稱す、吉左衛門の第四男。	一歲	
安政六 己未	二五一九 一八五九	萬延元 庚申	二五二〇 一八六〇
一三歲		一四歲	故ありて表面十五歳となし、元服して平八郎と改め、出仕して書役となる。

63
4

皇天明孝											
安政五 午戊 一八五八	安政四 巳丁 一八五七	安政三 辰丙 一八五六	安政二 卯乙 一八五五	安政元 寅甲 一八五四	嘉永六 丑癸 一八五三	嘉永五 子壬 一八五二	嘉永四 亥辛 一八五一	嘉永三 戌庚 一八五〇	嘉永二 酉己 一八四九	嘉永元 申戊 一八四八	弘化四 未丁 一八四七
一一八	一一七	一一六	一一五	一一四	一一三	一一二	一一一	一一〇	一〇九	一〇八	一〇七
一一八	一一七	一一六	一一五	一一四	一一三	一一二	一一一	一一〇	一〇九	一〇八	一〇七
才氣漸く儔輩を抜くも のあり。				此の頃より西郷吉次郎 に漢字を、川久保清一 に漢字を、薬丸半左衛 門に漢字を、相撲を学 ぶ又水泳、相撲を学 む							十二月二十二日薩摩國 鹿兒島郡加治屋町の邸 に生る名を仲五郎と稱 す、吉左衛門の第四男。
皇天治明											
明治元 辰戊 一八六八	慶應三 卯丁 一八六七	慶應二 寅丙 一八六六	慶應元 丑乙 一八六五	元治元 子甲 一八六四	文久三 亥癸 一八六三	文久二 戌壬 一八六二	文久元 酉辛 一八六一	萬延元 申庚 一八六〇	安政六 未己 一八五九		
一一八	一一七	一一六	一一五	一一四	一一三	一一二	一一一	一〇〇	九九		
一一八	一一七	一一六	一一五	一一四	一一三	一一二	一一一	一〇〇	九九		
一月一日乗組を命ぜられ、薩摩の軍艦に乗り、三月三日、日清の戦いで、乗組と共に、島根の海軍に属して、入隊した。父及兄と共に、七月、英艦隊の薩摩に襲撃を受けるや、父及兄と共に、出陣した。	一月一日乗組を命ぜられ、薩摩の軍艦に乗り、三月三日、日清の戦いで、乗組と共に、島根の海軍に属して、入隊した。父及兄と共に、七月、英艦隊の薩摩に襲撃を受けるや、父及兄と共に、出陣した。	一月一日乗組を命ぜられ、薩摩の軍艦に乗り、三月三日、日清の戦いで、乗組と共に、島根の海軍に属して、入隊した。父及兄と共に、七月、英艦隊の薩摩に襲撃を受けるや、父及兄と共に、出陣した。	一月一日乗組を命ぜられ、薩摩の軍艦に乗り、三月三日、日清の戦いで、乗組と共に、島根の海軍に属して、入隊した。父及兄と共に、七月、英艦隊の薩摩に襲撃を受けるや、父及兄と共に、出陣した。	一月一日乗組を命ぜられ、薩摩の軍艦に乗り、三月三日、日清の戦いで、乗組と共に、島根の海軍に属して、入隊した。父及兄と共に、七月、英艦隊の薩摩に襲撃を受けるや、父及兄と共に、出陣した。	一月一日乗組を命ぜられ、薩摩の軍艦に乗り、三月三日、日清の戦いで、乗組と共に、島根の海軍に属して、入隊した。父及兄と共に、七月、英艦隊の薩摩に襲撃を受けるや、父及兄と共に、出陣した。	一月一日乗組を命ぜられ、薩摩の軍艦に乗り、三月三日、日清の戦いで、乗組と共に、島根の海軍に属して、入隊した。父及兄と共に、七月、英艦隊の薩摩に襲撃を受けるや、父及兄と共に、出陣した。	一月一日乗組を命ぜられ、薩摩の軍艦に乗り、三月三日、日清の戦いで、乗組と共に、島根の海軍に属して、入隊した。父及兄と共に、七月、英艦隊の薩摩に襲撃を受けるや、父及兄と共に、出陣した。	一月一日乗組を命ぜられ、薩摩の軍艦に乗り、三月三日、日清の戦いで、乗組と共に、島根の海軍に属して、入隊した。父及兄と共に、七月、英艦隊の薩摩に襲撃を受けるや、父及兄と共に、出陣した。	一月一日乗組を命ぜられ、薩摩の軍艦に乗り、三月三日、日清の戦いで、乗組と共に、島根の海軍に属して、入隊した。父及兄と共に、七月、英艦隊の薩摩に襲撃を受けるや、父及兄と共に、出陣した。	一月一日乗組を命ぜられ、薩摩の軍艦に乗り、三月三日、日清の戦いで、乗組と共に、島根の海軍に属して、入隊した。父及兄と共に、七月、英艦隊の薩摩に襲撃を受けるや、父及兄と共に、出陣した。	一月一日乗組を命ぜられ、薩摩の軍艦に乗り、三月三日、日清の戦いで、乗組と共に、島根の海軍に属して、入隊した。父及兄と共に、七月、英艦隊の薩摩に襲撃を受けるや、父及兄と共に、出陣した。

四九

多磨墓地へ斂葬し、世界的偉人は永へに安らかに眠る。
元帥の葬儀は國葬を以て昭和九年六月五日、日比谷葬場に於て行はれた。國を擧げて哀悼す。同夜

下陸上今						
昭和元 寅丙	大正二 丑乙	大正三 子甲	大正三 亥癸	大正二 戌壬	大正二 酉辛	大正九 申庚
二五八六 一九二六	二五八五 一九二五	二五八四 一九二四	二五八三 一九二三	二五八二 一九二二	二五八一 一九二一	二五八〇 一九二〇
八〇歳	七九歳	七八歳	七七歳	七六歳	七五歳	七四歳
同月同日新帝葉山新御 候し龍顔に拜謁し奉 る。十二月二十五日天皇崩 御に際し葉山御用邸に 十二月二十日勳功に依り 菊花章頸飾を授けら る。十一月十日勳功に依り 典に酒肴料下賜さる。並 一月十五日恒例尙齒恩 一月十日、雨陛下銀婚 式につき豊明殿の正午 御宴に陪食の榮に與り ホニランド國より勳章 を贈らる。	議定官に補せらる。 三月東宮殿下の九州行 啓に扈從。	同日東宮殿下より御紋 章付銀製花盛器を賜は る。十月大正三四年戦役の 功に依り金杯壹組を賜 はる。	三月一日東宮御學問所 職員職制廢止せられ同 職員を解かる。同日三 條吉則作御紋日 散太刀及び金子一封を 賜はる。同日東宮殿下より 御紋章付銀製花瓶一對 を賜はる。七月五日東京市に轉 籍。九月三日東宮殿下横濱 御著に付御召繻香取に 御奉迎。	五月御來朝の英皇儲プ リス殿下、鹿兒島方面 御巡遊の際、鹿兒島埠 頭に御出迎。	七月五日東京市に轉 籍。九月三日東宮殿下横濱 御著に付御召繻香取に 御奉迎。	同日東宮殿下より御紋 章付銀製花盛器を賜は る。十月大正三四年戦役の 功に依り金杯壹組を賜 はる。
昭和五 午庚	昭和四 巳己	昭和三 辰戊	昭和二 卯丁	昭和二 卯丁	昭和二 卯丁	昭和二 卯丁
二五九〇 一九三〇	二五八九 一九二九	二五八八 一九二八	二五八七 一九二七	二五八六 一九二六	二五八五 一九二五	二五八四 一九二四
八四歳	八三歳	八二歳	八一歳	八一歳	八一歳	八一歳
五月十六日軍縮會議問 四月二十九日天長節祝 賀會に参列。四月三十日靖國神社大 祭に参列。	一月五日新年御宴會に 参列。四月一日軍縮會議回訓 案に對し加藤軍令部長 岡田參議官の訪問を受 く。四月二十九日天長節祝 賀會に参列。四月三十日靖國神社大 祭に参列。	二月より約二ヶ月大患。 四月二十三日靖國神社 臨時大祭に参列。四月 五月三日グロスタ1公 殿下のガ1タ1勳章捧 呈式に参列。 五月二十七日海軍記念 日祝賀會に會す。八月十 日露戦争の黄海々戰 二十五周年記念日芝山 内水交社に會す。 十月に明春倫敦に開催 される海軍主幹部の重要 對策及準備會に参列。 十一月六日濱口首相の 招待をうけ首相官邸に 會す。 十一月陸海大演習の爲 上野驛御出發の陛下を 御見送り申す。 十二月一日三笠訪問。	二月七日大正天皇御大 葬に際し靈輦に供奉申 上ぐべきの處特に風邪 の故を以て新宿葬場殿 に先着参列の御沙汰に 浴す。 七月二十八日聖上陛下 海軍大演習御統裁のた め御奉送申上ぐ。八月三 日御召艦山城佐伯灣に 御入港の際便乗陪觀の 榮に浴す。 十月三十日大觀禮式舉 行せられ各宮殿下以下 文武官五百名と共に御 召艦陸奥後甲板に於て 宴を賜はる。 十一月六日御大典を行 幸遊ばさる。陛下を御見 送す。 十一月十日京都に於け る御大典に参列。	二月七日大正天皇御大 葬に際し靈輦に供奉申 上ぐべきの處特に風邪 の故を以て新宿葬場殿 に先着参列の御沙汰に 浴す。 七月二十八日聖上陛下 海軍大演習御統裁のた め御奉送申上ぐ。八月三 日御召艦山城佐伯灣に 御入港の際便乗陪觀の 榮に浴す。 十月三十日大觀禮式舉 行せられ各宮殿下以下 文武官五百名と共に御 召艦陸奥後甲板に於て 宴を賜はる。 十一月六日御大典を行 幸遊ばさる。陛下を御見 送す。 十一月十日京都に於け る御大典に参列。	二月七日大正天皇御大 葬に際し靈輦に供奉申 上ぐべきの處特に風邪 の故を以て新宿葬場殿 に先着参列の御沙汰に 浴す。 七月二十八日聖上陛下 海軍大演習御統裁のた め御奉送申上ぐ。八月三 日御召艦山城佐伯灣に 御入港の際便乗陪觀の 榮に浴す。 十月三十日大觀禮式舉 行せられ各宮殿下以下 文武官五百名と共に御 召艦陸奥後甲板に於て 宴を賜はる。 十一月六日御大典を行 幸遊ばさる。陛下を御見 送す。 十一月十日京都に於け る御大典に参列。	二月七日大正天皇御大 葬に際し靈輦に供奉申 上ぐべきの處特に風邪 の故を以て新宿葬場殿 に先着参列の御沙汰に 浴す。 七月二十八日聖上陛下 海軍大演習御統裁のた め御奉送申上ぐ。八月三 日御召艦山城佐伯灣に 御入港の際便乗陪觀の 榮に浴す。 十月三十日大觀禮式舉 行せられ各宮殿下以下 文武官五百名と共に御 召艦陸奥後甲板に於て 宴を賜はる。 十一月六日御大典を行 幸遊ばさる。陛下を御見 送す。 十一月十日京都に於け る御大典に参列。

五五

大正八 未己	二五七九 一九一九	七三歳	同日東宮殿下より御紋 章付銀製花盛器を賜は る。十月大正三四年戦役の 功に依り金杯壹組を賜 はる。
大正八 未己	二五七九 一九一九	七三歳	同日東宮殿下より御紋 章付銀製花盛器を賜は る。十月大正三四年戦役の 功に依り金杯壹組を賜 はる。

	昭和六未辛 二五九一 一九三二	昭和七申壬 二五九二 一九三三	昭和八酉癸 二五九三 一九三三	昭和九戌甲 二五九四 一九三三
	八五歳	八六歳	八七歳	八八歳
問題に付き濱口首相の訪 問を受く。五月二十七日日本海 軍に水交社に會す。祝賀 會に水交社に會す。祝賀 七月軍事參議院會議に 參列。七月二十三日正式參 院會議終了後谷口軍令 部長と山御用邸に何 部員と山御用邸に何 帥より奉答文を捧呈 す。	一月四日自邸よりラヂ オ放送。	八月伊豆伊東に靜養。 十月四日英國東洋艦隊 司令官ドレイア大將 がシエリコ元帥のメ ツセーシを携へて來邸 訪問。	五月二十七日病重き旨 發表。同月二十九日勳功に依 り特に陞して侯爵を授 けらる。同三十日從一位に敘せ らる。同日午前七時薨去。 同日三十一日、槽入式、 慰靈祭。六月四日長き邊より甘 露寺侍從御差遣誄を賜 ふ。同月五日比谷に於て 國葬、多磨墓地へ歛葬。	

19

63
4

昭和九年六月十五日印刷
昭和九年六月二十日發行

頒布實價金七拾錢

6.19

不許
複製

謹輯者 東鄉元帥敬慕會

發行兼 角田善苗

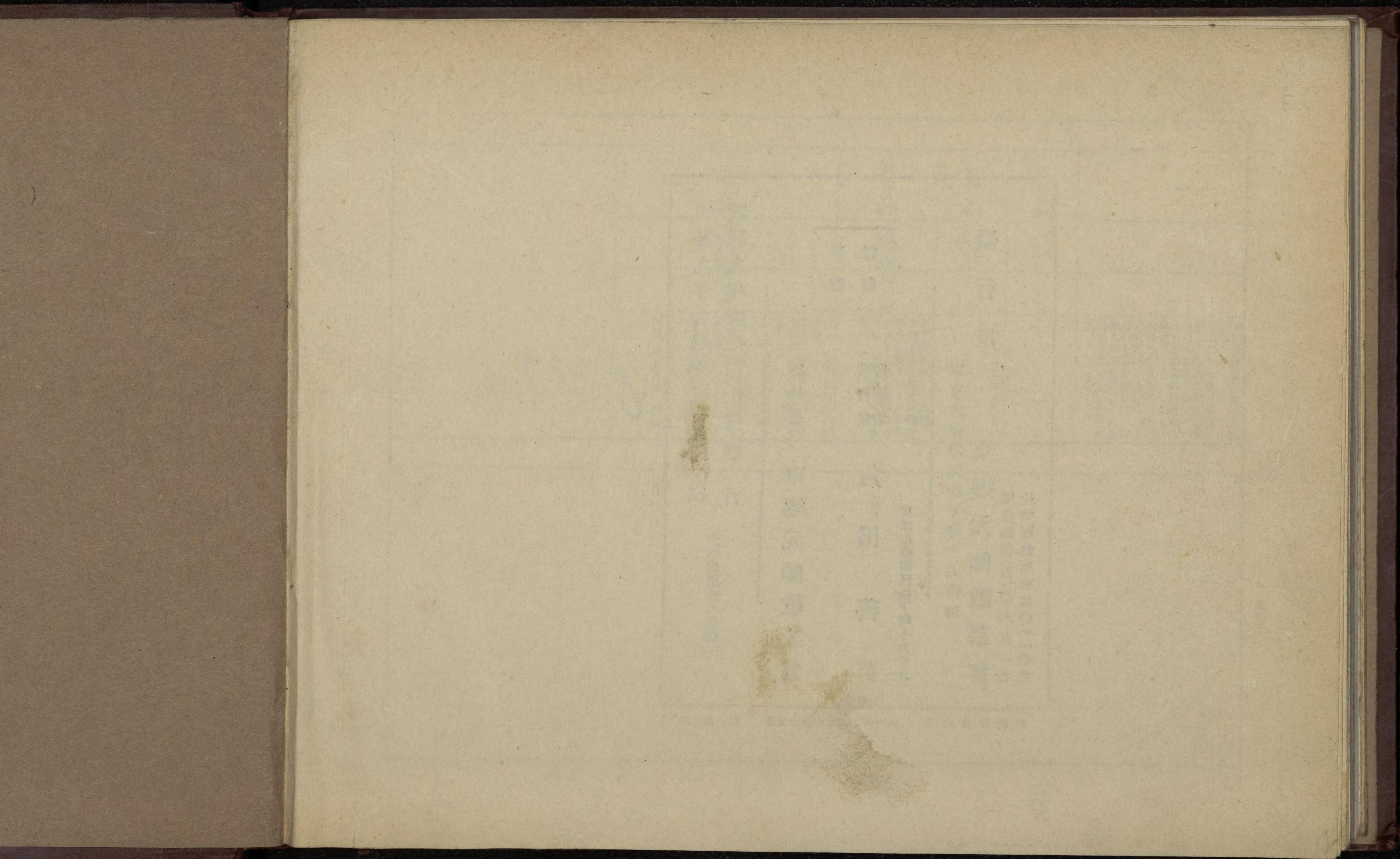
東京市神田區松下町十六番地

發行所 東鄉元帥敬慕會

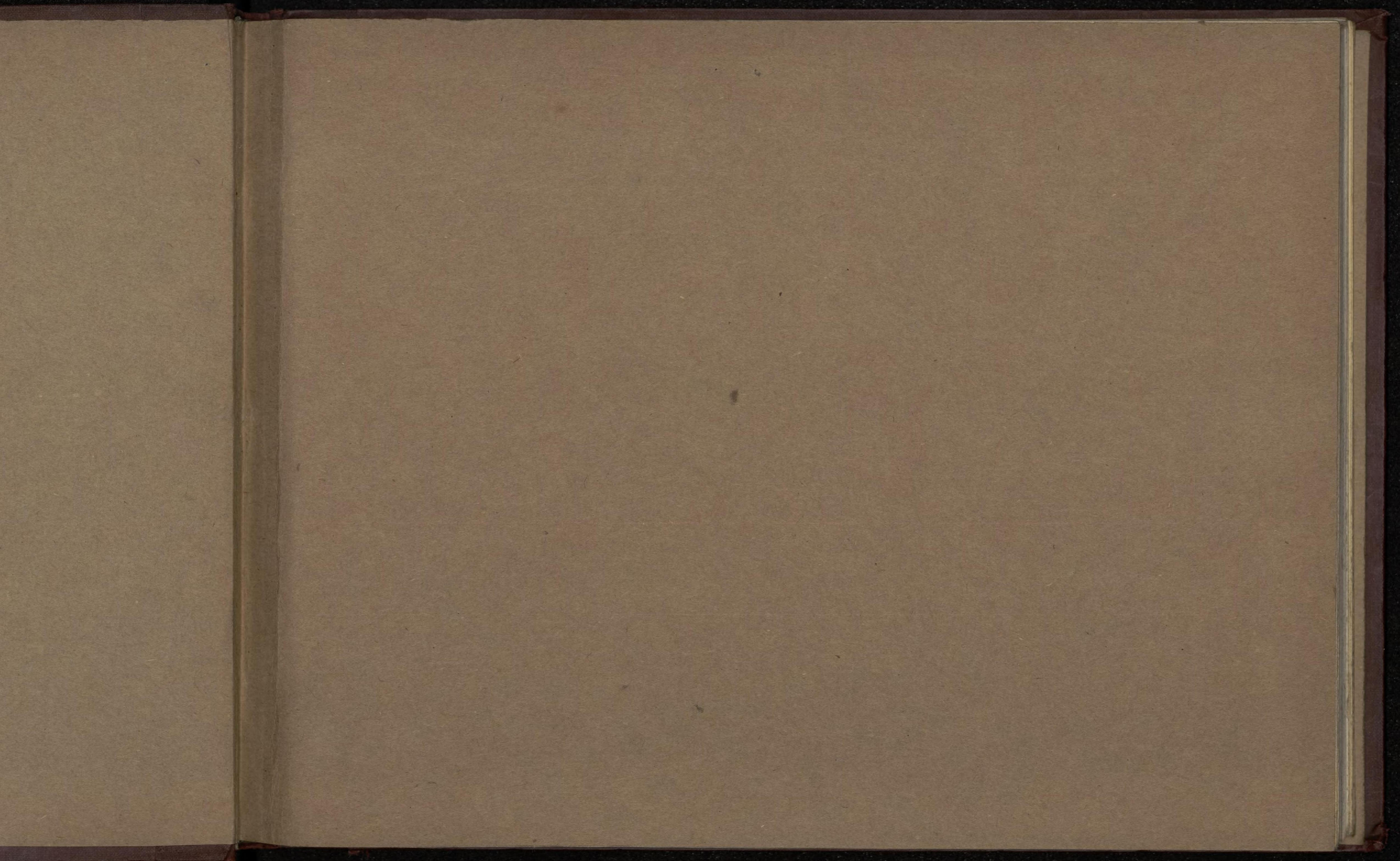
東京市神田區松下町十六番地

電話神田(25)〇六九一番
振替貯金東京二〇二〇番

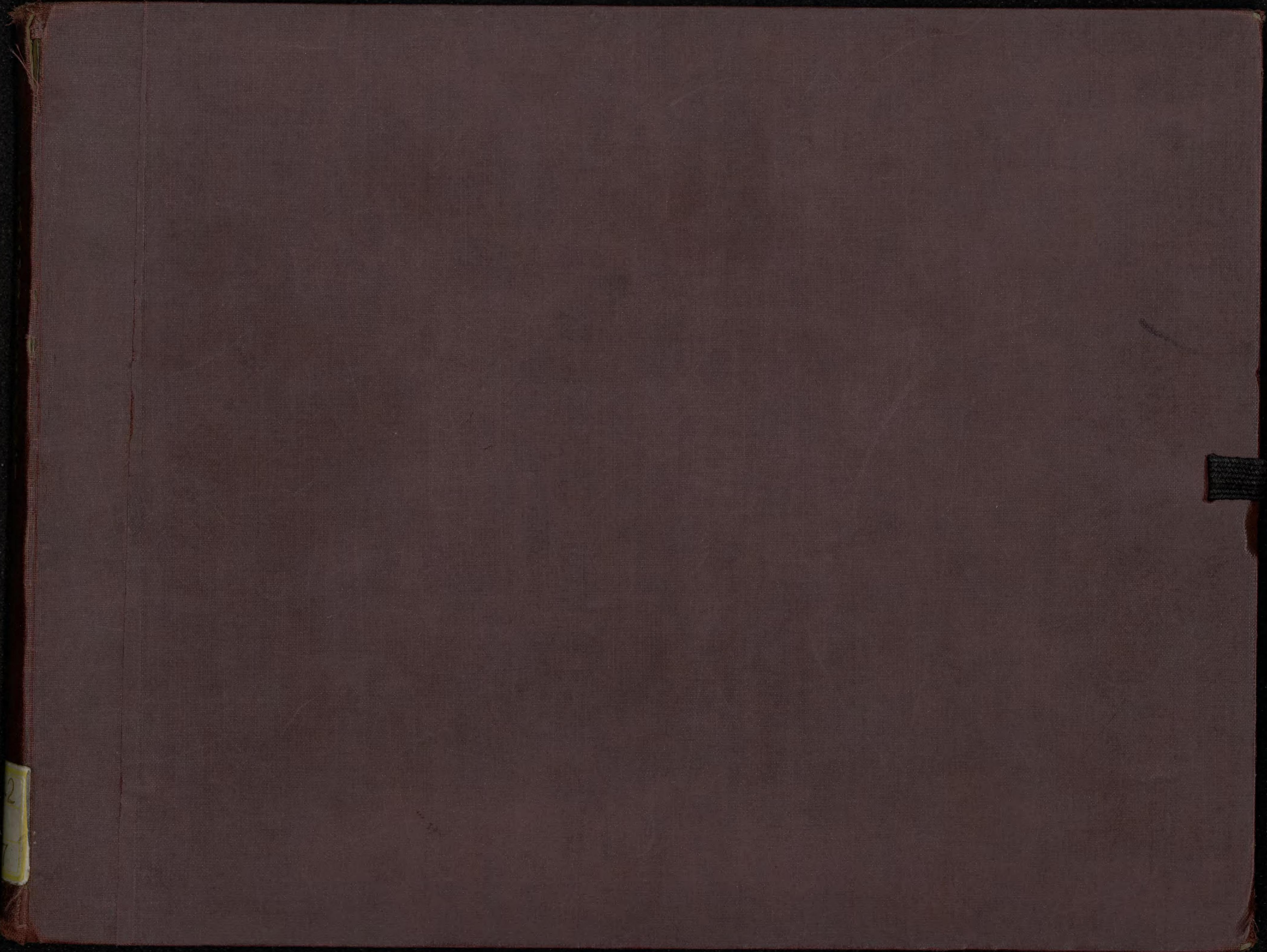
印刷所 東京市神田區松下町一六一 三合印刷所



63
4



639
47



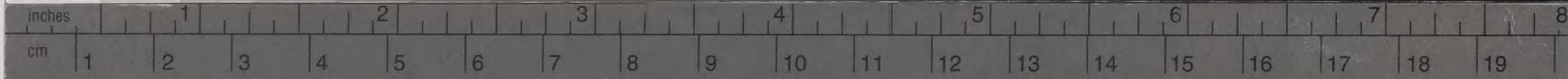
2

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

